

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和七年九月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十四卷 第六号（通巻二八二号）

万象

B A N S Y O

九月号

2025. 9



九月の句

庭の木木あらまし実生月に照る

高橋ひろ

空の澄み月が明るく大きく照り渡る。誘われるようにゆっくり庭に目を向ける。庭に出て一本一本撫でるようにたたずむ。

以前に〈実生松二尺に足らず緑摘む〉の句のあることから、どの木もみな大きくなっている。

これは二人で旅行した時のもの、ちよūdよい紅葉。こっちは山麓の畑仕事のときのもの。そう言えば、あれも実生で鉢植えのものを地におろしたものだ、とひろさんは言う。

庭には思い出がいっぱい詰まっている。

(高野松風)

令和七年

九月号

万象

BANSYO

作曲自体はさほど難しくない。
難しいのは余計な音符を削ることだ。

(J・ブラームス)

万 象

令和7年9月号

主宰作品 からすりの花 江見悦子 4

万象の窓^{④②} 「しょうけい館」を訪ねて 江見悦子 5

名誉顧問作品 夏の月 小林愛子 6

風音集

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩^{③④} (九月号) 小林 愛子 10

同人作品

江見悦子選 11

万象俳句賞 速報 30

同人作品の佳作 江見悦子選 31

同人会だより 「風」の師欣一・綾子の句碑 前田貴美子 32

7月の「万象」オンライン同人句会高点句

珈琲ぶれいく^{⑥④} 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞(七月号) 前田貴美子 34

同人特別作品

三 番 瀬 久保村淑子 36

石 狩 野 中鉢 弘一 37

続・風のしをり^{②①} 子規と私（八） 細見綾子 編 集 部 38

万葉の抒情^{②⑤} 『万葉集』にたずねる抒情の源流^{②⑤} 橋本 清 39

万象ノオト「消しゴム」 松井 宣夫・杉山千鶴子・井端 久子
佐藤 幸示・大長 文昭・加山ひさ子 40

北から南から 荻窪三庭園を訪ねて（東京） 下嶽 孝一 42

万象作品

江見悦子 選 43

万象作品の佳句 江見 悦子 54

私のこの一句 藤原千代子・名和 政代・増田 幸子・山下 良江 57

新中央句会報（6月例会） 編集部・校正担当 58

ルビーの小函（九月号） 編集部・校正担当 61

東西南北 62

からすうりの花

江見悦子

(主宰)

鳴りやまぬ無人踏切白あぢさゐ
退院の指ほつそりとソーダ水
沖縄忌ニライカナイの海の青
白々と珊瑚の道や仏桑華
大甕の泡盛育つガマの奥
吐く息に四肢ゆるびたり水中花
真夜の夢つむぐやからすうりの花

「しょうけい館」を訪ねて

江 見 悦 子

七月、東京千代田区の九段下にある「しょうけい館（戦傷病者資料館）」を訪ねました。戦後80年特別企画展「武良茂（水木しげる）の戦争体験」が目的でした。ご承知のように、水木しげるは『ゲゲゲの鬼太郎』で、大ブームを起こした国民的漫画家、1922年（大正11）に生まれ93歳で亡くなりました。私の父が1歳違いの1923年生まれ、同じく93歳で亡くなりました。

「しょうけい館」の図書室には戦傷者の体験記や戦争体験者の回想記、医療、福祉、援護施設などに関する書籍がぎっしりと収められ、水木しげるの著作も並んでいます。作者自身が主人公である長編戦記マンガ『総員玉碎せよ！』のあとがきには、90%が事実と書かれています。昭和18年春、召集令状を受けた主人公の二等兵は、ラバウルのあるニューブリテン島に送られ、島の半分が連合軍に占領されたこの地で敵と遭遇します。「死に甲斐」「美しい死」を求めて玉碎を命じる大隊長の下、奇跡的に生き残りますが、空爆で左腕を失いマラリアを発症し、野戦病院に送られます。徹底してリアルな戦場の日常が描かれ、様々な「死の形」が淡々と描かれる画面には涙みがあります。

水木しげる氏が南方に出征した頃、私の父は昭和18年10月21日、神宮外苑で行われた学徒出陣式典に参加し、その後神奈川県相模原市にあった陸軍通信学校で訓練を受けました。結局戦地には行かぬまま敗戦を迎え、戦後は教員として出発することになります。

昭和22年に復員した水木氏は、一時期美術学校に通いながら様々な商売をし、募金旅行にも出かけました。傷痍軍人による「白衣募金」という言葉を知り、都内の大きな駅でアコデオンを手にした、軍帽に白衣の人を見て衝撃を受けた子供時代の思いが蘇りました。水木氏は紙芝居画家、貸本漫画家として、日本全体が貧しかった戦後の時代を生き抜きます。

戦後80年間、日本では戦争の無い平和な時代が続きましたが、世界各地で民族間の抗争、戦いが絶えず、被害者が増え続けている現在の世界状況とは無縁ではありません。目を見ひらき、耳を澄ませて現実と向き合い、当事者意識を失わずに課題に向き合っていく重要さを思いました。ちょうど東京の梅雨が明けたこの日、九段の空は真っ青に晴れ上がっていました。

夏の月

小林 愛子

(名替顧問)

賜りたれば

句集読むひと日素足ですごしけり
地より翔つ地の色背負ひ夏の蝶
一夜酒には藍色の江戸切子
見渡して白花ばかり明日は夏至
なまぬるき魚の腸ぬく遠き雷
目つむりて見ひらきてこの酷暑かな
亡き人の気配そびらに夏の月

螢の夜

中村千久

(編集人)

破れ庭に残る井筒や花あやめ
ゆらゆらと焼酎火出て夏芝居
握る手と握り返す手螢の夜
裏町のビストロ七月十四日
コンビニにちやりんこ並べ日焼の子
ふる里や畳廊下の籐寝椅子

燕の子

福島せいぎ

(顧問)

燕の子口開けてをり老人も
風鈴を今はの人に聞かせけり
びんづるの膝の撫で艶蟻地獄
水平線傾ぐ岬の袋掛
岩を噛む室戸岬の夏あざみ
まんばう食ひ土佐の夕立のなか帰る

夜鷹

柳澤宗正

(顧問)

舫ひ船軋む波止場や群海月
参拝の女人の背へ初みんみん
鰻重に寡黙となりし一家かな
はやばやと氷室が空に大八洲
夜鷹鳴く谷戸の闇夜の肝試し
雪の無き不二の高嶺や晩夏光

冷素麺

中條睦子

(同人会会長)

故郷に血縁薄れ冷素麺
山楂子の青き実鳥を寄せ付けず
仏教書抜きたる書架の涼しさよ
はらからの姉と二人になり端居
高塀の屋敷内より四十雀
知らぬ間に猫の来てゐる夏座敷

青涼し

松原智津子

(北海道)

親鴉

沢辺たけし

(千葉)

短夜や寝つかぬ闇を救急車
演習林細道の奥滝の音
炎天下道路工夫の影縮み
弔文書く眼鏡の曇る炎暑かな
祖父譲り盆の貝摺青涼し

子別れの踏ん切りつかぬ親鴉
冷房を出づ白昼の黙の街
青空の色うすれゆく炎暑かな
一瞬の天地反転夏燕
打水や袋小路に風生まれ

下野草

亀田やす子

(栃木)

ジャカランダ

吉中愛子

(東京)

鳴焼に甘き味噌だれ雨激し
下野草水琴窟のよくひびく
城址に棲みつゝ猫や栗の花
花茗荷つつん伸びて力石
山百合の花粉灰かに糸遊句碑

椅子出して巢立の燕見送れり
ジャカランダの花の降る中喪に向かふ
同級の僧の悲恋や片かげり
薄焼のじやこ天瀬戸の浜夕焼
ヘルペスの身を庇ひたる炎暑かな

鉄の匂ひ

榎本文代

(神奈川)

泰山木一花まぶしき雨あがり
螢見に鉄の匂へる町抜けて
朝曇紅茶にひたすクロワッサン
夏服にやはらかくゐて修道女
炎天や鉄屑あふれドラム缶

烏

瓜

神田美穂子

(静岡)

砂抜きの貝が泡吹く半夏生
烏瓜咲くやかはたれ星とぼり
美容室出でて極暑の影を踏む
くわつと射す雨後の日差しや夾竹桃
夕顔や山せまり来る伊賀の闇

風の香

井村和子

(石川)

さくらんぼ舌に転がしクイズ解く
手鏡に風の香まとふ髪撫づる
晩学の一書に飛び来黄金虫
鮑採る少女の海女に濃き笑くぼ
民宿の椽に転がる大南瓜

雑踏の隙間

前田貴美子

(沖縄)

山法師もとより雨の上野山
十葉の花にこごめる旅靴
横顔が通る額紫陽花のほとり
雑踏の隙間女の黒レース
この街に捨つるつもりの二重虹

風音散歩 ③④ (九月号) 小林 愛子

ゆらゆらと焼酎火出て夏芝居 中村 千久

夏芝居とは夏の演劇を指す。土用の期間に行われる臨時の興行で納涼を目的として、怪談狂言や水狂言をいう。

句の「ゆらゆらと焼酎火出て」で一氣にレトロの世界が広がる。「焼酎火」は歌舞伎の小道具で、綿に焼酎（アルコール）を浸し、差し金の先に釣って燃やす火。青い炎を出して狐火、幽霊の場などに使う。差し金の黒塗りの竹竿を振る姿を想像するだに、納涼の演劇の面白さに拍手したい。

祖父譲り盆の貝摺青涼し 松原智津子

祖父から譲り受けた盆を眺める作者、貝摺の美しさは時を経ても変わらない。真珠光を放つ貝の部分をとって薄片とし、漆器あるいは木地などにはめこんで装飾とする。

一般に薄貝を用いたものを青貝といい、厚貝を用いたものを螺鈿という。又貝殻で飾ることを貝摺ともいう。「青涼し」は美しさに魅かれると共に、祖父との距離感を縮めている。

城址に棲みつく猫や栗の花 亀田やす子

猫は一般には家畜猫を言う。以前は鼠害対策として飼育したが現在は愛玩用、自由な猫は城址に棲みつく。そこには栗

の花が咲くが、あの鋭敏な猫が花の臭みに耐えられるのだと妙に感心したりする。（雀等がぶら下るなり栗の花 綾子）
こうしてみると、栗の花は動物と相性が良いのかもしれない。

この街に捨つるつもりの二重虹 前田貴美子

二重虹は、めずらしい現象。通常の虹の外側に色の順番が逆の副虹が現れる。これは宇宙からの幸運のサインとされる。この街に「捨つるつもり」で来た人。何を？ それは思い詰めた執着か、はたまた恋か、誰でもよい。プロローグめいた言葉につづく「二重虹」が写真である。俳句は短いから虹を見た結果よりも現在が大切。物語になる句である。

螢見に鉄の匂へる町抜けて 榎本文代

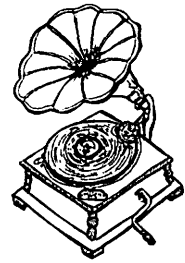
夏の夜、水辺などに螢を見に行くのが「螢見」「螢見物」である。最近では螢が少なくなり「螢狩」の遊びまでいかなかったが、せめて闇に明滅する美しい螢火を見たい思いであろう。螢の生息地へと、「鉄の匂へる町」を通り抜けて来たのが発見、鉄の質感が螢のはかなげな光を際立たせる。

青空の色うすれゆく炎暑かな 沢辺たけし

炎暑は真夏の燃えるような暑さを言い、極暑と共に最も厳しい暑さを言う季語と歳時記にある。しかも「炎」の文字が視覚的に拍車をかけ、白い炎が真昼にゆらめくかと思われる。今年は日本の各地でそれぞれ経験済みと思う。青空の色が「うすれゆく」はまさに白日の幻を見ているのである。

同人作品

江見悦子選



札幌 岡本敬子

群舞行く花アカシアの薫る街
舞ひ進む老いも若きも汗うつくし
ハンカチの花ひらひらと苞揺らす
藤房を豊かに咲かせ老ゆる幹
ほうたんや風に揺るるも揺れざるも

札幌 林陽子

リラ冷えや小さき遺骨胸高に
初七日の母とふたりや白牡丹
里山のみどり優しき七七忌
供花に足す雨にほぐるる夕牡丹
朴の香の風重ねけり森の闇

札幌 落合裕子

松の秀に鶯雀あおじの声のまだ若し
迷ひなく皆天を突く栃の花
動物園かこむ木立や蟬時雨
小暗きに山芍薬の白確か
浅漬の葉のしやしやきと夏蕪

札幌 濱谷和代

蚯蚓出づ天地返しの土黒く

教会へ咲き繼ぐ赤き野ばらかな
父の忌や青き六月巡り来る
潮の風抜くる酒蔵冷し酒
またたく間利尻山麓海霧の中

札幌 大内 和 憲

結界をそばだて風鈴鳴りづめに
日焼顔くづし工夫の齒で笑ふ
往診袍抱へ茅の輪をくぐりたり
まだ火照る夏行の果てし臙かな
沖繩忌過去帳曝す白手袋

札幌 大内 マキ子

岬馬の人恋ふ眼風露草
海霧晴れて港彩る大漁旗
浜豌豆鱗びかりの網干され
こめかみに遠き記憶やかき氷
父の日の小さき拳の肩たたき

札幌 中 鉢 弘 一

重たげに垣根を越ゆる白牡丹
薄ら日や蓮の浮葉の銀なせる
はこべらの花芯に受くる雨の粒

林道の柵の間に間に蜘蛛の糸
からまつ土は柔らに五月闇

札幌 北 浦 詩 子

五月闇木桶の眠る醬油蔵
人けなき棚田に揺るる青葉影
こんぴらさん大門過ぎの片かげり
扇風機付きのベストは若大工
陸揚げのクレーンゆらぐ大西日

江別 佐 藤 哲

大夏野長き貨車より牛の声
牛ねまる牧野^{ぼくや}にぬつと夏の月
盆唄やマイクはなさぬ老教師
漁を待つ婆網小屋で三尺寝
魚市場秋刀魚バケツで振る舞はれ

江別 太 田 佳 美

根を張れと古き苗札差し直す
森から森えぞ春蟬のセツションか
夏よもぎ売地の札を隠しをり
真夏日や塩飴含みバス停へ
白と黄の夏蝶絡み青空へ

新潟 高橋 ひろ

こがねむし起き直るとき脚騒ぐ
能登攻めて来し雷雲が佐渡掩ふ
窓ひとつがわたくしの四季夏の雲
三歳の姉があやす子小判草
生真面目な顔して草笛の上手

新潟 高野 松風

花びらの紅のひと刷毛白つつじ
満天星の花の鈴敷く塀の外
君子蘭みめよき猫と目の合へり
朝の虹佐渡に片足添へにけり
ありまきに乗つ取られたる莖の芯

益子 光岡 れい子

珈琲の香青蔦からむ高窓へ
茹であがる湯気のさみどりはじき豆
幾種もの薔薇の賑はふ陶干場
たそがれの風にゆうらり芹の花
花えごのこぼるるを受く小さな掌

芳賀 大村 かし子

串焼のほんのり香る年魚かな

庭前に亡夫の好きな花柘榴
強風に田面波立てる植田かな
水やりの地すれすれに梅雨の蝶
父の日に鯛の打菓子供へけり

宇都宮 阿久津 勝利

コシヒカリ植えて児童の泥の顔
葉柳の揺るる川辺の蔵造り
廃屋の屋根に草生ゆ走り梅雨
石切場跡のライブや夏の宵
理髪屋の鏡の奥の植田かな

栃木 上岡 佳子

爺ちやんのシャツがびつたり更衣
でむしの雨粒ひとつ落としけり
歌麿展出でて巴波川の錦鯉
川向ふの郭公の声届きけり
弟の逝きて十年鮎の川

佐野 増田 幸子

電線に並ぶ子燕やすらけし
一瞬の影を水田に夏燕
夕の風ボートを磨く女子高生

花合歡を仰ぐや朝の空低し
夏日きら片葉の葦の繁る池

佐野 加藤 季代

夏萩の崖に枝垂るる札所寺
揚羽蝶森の木洩れ日拾ひゆく
片蔭を出でて短き影法師
一つ麤を緋鯉の口の奪ひ合ふ
両肢や枝をこぼるる青蛙

佐野 阿部 澄

玻璃越しに手を振る幼手毬花
河川敷に客待てるバス風涼し
薄暑光音なく過るグライダー
あぢさゐの陰に家鴨のうとうと
釣り上げし篋鮒を置く夏の草

佐野 芝宮留美子

花に葉に雨をとどめて薔薇匂ふ
千年の椎ふところに青葉寺
青田風筑波山の裾野渡り来る
夏空に真白なグライダー浮游
風涼し百人一首の格天上

雛罌粟やローカル線は日に二本
花は葉に幼の言葉日々に増え

佐野 島田 和枝

寺若葉漆黒の床きしきしと
犬連れて乗り込む渡舟風薫る
トロ箱を這ひ出し蛸の歩きだす

佐野 売野 緑

外流し釣果の穴子大暴れ
かなぶんの衆寮の窓に音立てて
茅屋根の苔の分厚さ梅雨に入る
蔵壁の青蔦風と遊びをり
方丈の木組み頭や夕立くる

佐野 店網 洋子

脚立たてキウイの受粉夏来る
校庭の六人七脚夏の空
雨雫淡し青鬼灯の先
鎌使ふときをり植田風来る
弓なりに止まるとうすみ蜻蛉かな

足利 大木 茂

石垣に吹かるる長き蛇の衣

風涼しケーブルカーの紙切符
嬌恋の黒土柔しキャベツ畑
垂れさうで零れぬたれや穴子鮎
よく喋る鳥が小枝に梅雨晴間

土浦 澤 照 枝

早朝のひと手間黒穂ぬき終ふる
船着き場へまはり道して花菖蒲
夕焼を富士存分に使ひ切る
浦越しの牛久大仏大夕焼
蕉風や夢の半ばに逝きたまふ

加須 茂 木 弘 子

束の間を利根の渡しに涼みをり
夏めくや鳶の躲すグライダー
此処らの田雨引山の清水かな
経に育つ雨引山の燕の子
石楠花の根方山水奔りける

さいなま 山 本 右 近

梅雨兆す古書店街でオムライス
でで虫や銀の軌跡を葉の裏に
万巻の書架のしづけさ梅雨真中

今朝採りし茄子瑞々しとげとげし
目鼻無きマネキンとほる梅雨晴間

所沢 三 好 か ほ る

玫瑰や北の岬の波荒き

むさし野の隅に紫草しろじろと

トランペット一人吹きある新樹光

口あけてはみ出してをり燕の子

八ヶ岳晴れて沼辺の九輪草

所沢 南 雲 秀 子

溪流に沿ふ紫陽花の散歩道

老鶯の声ばかりなるダム湖かな

柿若葉山家の蕎麦をすすりたる

名栗湖へなだるる半夏生の白

猛暑日をこもり古本整理かな

千葉 田 中 道 江

餌をつける少年ひとり浜おもと

野にあれば野の花となる額の花

梅雨夕焼エスプレッソをベランダで

泰山木花得て緑はなやげり

天井に龍の声あり梅雨重き

千葉 松浦 陵 保

江ノ島の海鮮二つビール酌む
岩屋へと続く急坂青嵐
緑蔭の江ノ島宮へ栗鼠現るる
竹筒に水羊羹のおもてなし
風上の離陸機の音風薫る

千葉 喜多恭 仁子

磐梯山のふところ深く新樹満つ
緑さす東寺遥かに京都駅
夏椿夫の忌近く開き初む
父の日やネクタイ三本遺したる
汚染土の行き場決まらず又梅雨に

千葉 大月 玲子

斎田の水整ふる田植時
谷津田道夏鶯の舌かろし
緑蔭やハープ苑よりピアノの音
透明な池の空より蜻蛉生れ
淋しさに遠き青嶺を探しけり

千葉 竹澤 竹里

木道を行けば池塘に水芭蕉

トレッキング黄菅の風に誘はれて
花菖蒲ジャージャー橋を飾りたり
大内宿流るる沢に西瓜浮く
保津峡に初蟬を聴く川下り

佐倉 大内 佐奈枝

池ひとつ埋め尽したり蛭蓆
踏むまいぞ藩主御廟の沙羅の花
微匂ふアルバムひらき悼みけり
鉄錆の万力赤し梅雨の月
救急車出払ひてをり溽暑の夜

佐倉 三屋 英俊

朝あけの沖や差し込む青葉潮
紫の一輪小間の涼しさよ
水切つて散らす日のきら夏燕
父の日の昨日と同じ夜風かな
対岸の螢火黄泉へはよ来よと

佐倉 横川 良子

アマリリス時の止まりし喫茶店
補助輪を外す笑顔や桜の実
城下町巡りて潜る茅の輪かな

余生とて想定外も心太
路地裏に物売りの声額の花

四街道 奥 太雅

畦道を滑る赤き斑やまかがし
プランターの土より寸の瑠璃蜥蜴
守宮落ち忍びのごとく着地せり
電線に羽撃き頻り燕の子
晴れよりも雲に明るき桐の花

四街道 塗 木 翠 雲

緑蔭に拾ひ読みたる詩集かな
青田風錠前錆びし水車小屋
新緑の光眩しむ磨崖仏
初夏の風にそよげる沼面かな
法名は釋の一字や沙羅の花

船橋 山下 良 江

つやめいて夕日をはじく柿若葉
裏道を救急車の音梅雨曇り
ばりばりとキャベツをはがし朝餉かな
流し場のボールに浅蜷の話し合ひ
屋根瓦つや増す梅雨の日暮かな

船橋 赤 堀 洋 子

子等の声消ゆるが合図慕鳴けり
踏ん張つて水飲む揚羽風の中
雨粒の重し新穂の猫じやらし
朝焼の裾を急げり掠鳥の群
葉を閉ぢて白く打たるる蓬かな

船橋 久保村 淑子

鹿威し間合の長き薄暑かな
駅出れば良太似の人梅雨晴間
友の家うつすら灯し沙羅の花
梅雨晴の車内つらつら手紙書く
犬嗅ぎて通り過ぎたり梅雨茸

船橋 片 桐 帆 一

たらひ出し子と母だけの日向水
花菖蒲正しく映す心字池
音立てて泰山木の花開く
錆色の塵となりたる夏椿
たぎる瀬に新樹の色の踊りたり

船橋 宮本 加津代

今日のことすべて忘れて髪洗ふ

米櫃の底の見えをり走り梅雨
胡瓜もみ塩に緑の移りけり
蚕豆のみどりの湯気の匂ひたち
焼け石の上するすると青蜥蜴

船橋 中嶋 久 登

朝まだき薫風抜くる地藏堂
ジェットコースターの悲鳴や夏来る
新緑へ旅客機の音落とし行く
無住寺の木香薔薇や塀の色
新緑や子供の声の溢れたる

柏 山本 とく 江

診断を待つ間騒げり梅雨鴉
風薫る白雲浮かぶ水の郷
新茶淹れ施設の夫を思ひたる
市役所の軒より巢立つ燕の子
よく跳ねる産毛の残る雀の子

柏 内田 郁 代

青島の鬼岩に寄する卯波かな
早苗田へ黒潮の風届きたり
ふる里の川ささ濁る梅雨入かな

高千穂の谷に鳴き交ふ時鳥
石楠花や肥後に海馬を祀る宮

柏 古川 京子

薔薇剪るや薔薇より赤き傷一筋
粕漬のほど良き焦げ目夕薄暑
研三句碑去りてはもどる不如帰
重さうな茅屋の杜花菖蒲
牧の牛若葉の風を反芻す

流山 穂 莉 照 子

いくたびも空裏返し夏燕
蟻の列お百度石へ来て乱れ
しなやかに風を織りゆく蜘蛛の糸
八方のどこも正面立葵
いつせいに命ふくるる梅雨晴間

東京 名和 政 代

時の日や歩きながらの漫画本
万緑の杜を飛びたつ白き鳩
薫風に二人三脚声限り
地下室はピアノ教室電波の日
パナマ帽詩吟の横丁現れて

東京 藤 田 裕 子

仰ぎ見る遺影百合の香強すぎる
カレー匂ふ学生街や青葉風
棚奥に揃ひの小鉢梅雨に入る
夏至近き夕べ手仕事ゆるゆると
黒南風や櫛に逆らふ額髪

東京 島 野 ひ さ

茄子苗の日毎太るを楽しみに
父の日の孫より若き写真かな
浴衣着し母と妹なつかしや
芝土に一本高きねじり花
濃紫陽花朝の散歩に誘はれて

東京 加 賀 葉 子

喜屋武の海へ真つ白き花沖縄忌
声明の音のゆらぎや新樹光
降り出しの雨音高し蓮の池
地下道を踏み出す一步炎天下
ががんぼの律儀にたたく磨硝子

東京 久 留 島 規 子

心太すする茶店の古床几

さみどりの棘やはらかし山椒の芽
伽羅路に山椒ぴりりと効かせたる
紫陽花の蕾は未だ色持たず
梅雨空を見上げて夫の旅靴

東京 下 嶽 孝 一

木道にさへづりおとす落羽松
沼揺れて何かゐるらしかきつばた
池底に日の斑の揺るる立夏かな
夏めくや池よりぬつと亀の首
神輿来る来るぞと人の集ひ来る

東京 草 間 三 香 子

統合となりし母校や青田風
下校子の傘で突くや小粒枇杷
ままごとの砂場の親子実梅落つ
掻き混ぜる糠床匂ふ溽暑かな
産土の杜の深さや青葉木菟

東京 岡 村 純 子

草覆ふ棚田一つの田植かな
初蟬や朝激しき雨の後
早朝の紫の風茄子太る

雨止んで日の差す方へ黒揚羽
螢火の葉裏にひとつ闇深し

東京 桑原優美子

枯れ時も散り時もなく水中花
喪の家の葉桜を雨叩きけり
生ビール幟はためく洋食屋
雨上がり庭の青葉の匂ひ立つ
全身を支ふる跣砂を踏み

東京 三村紀子

蚕豆のポタージユの出で午餐会
冷房のサロンで熱きダージリン
冷房と熱気の狭間自動ドア
あじさゐの何れの青も潔し
ひたすらに古道行く亀梅雨晴間

東京 小池清晴

目を凝らす水に隠るるめだかの子
山法師校門前の文具店
梅雨晴間調子外れのハーモニカ
追熟の青梅笹を明るうす
垣越ゆる隣家の庭の花茗荷

東京 一由久美子

靴底のやはらかく踏む散松葉
薔薇園の土やはらかく飾はれて
笹群るる朽根の闇に梅雨茸
軒先に歛出番待つ芒種かな
輕鳧の子の親鳥の水脈はみ出さず

武蔵野 砂地宏子

十字路を傘とりどりの梅雨入かな
曇天の光となりて枇杷たわわ
梔子の花の香華か無縁墓地
掌の香や青梅のお裾分け
煌めける朝日の雫青葡萄

立川 正田華子

斑猫の巢穴をつつく男の子
雨打てる縄文住居跡涼し
実梅落つ宝のごとく手の平に
枇杷熟るそのまま残る釣瓶井戸
十葉や尾張徳川狩場跡

町田 広瀬俊雄

明滅の螢とびかふ天龍川

暗闇に声をひそめて螢狩
草螢追へり幼の手をにぎり
時折は吊橋こゆる螢かな
川岸の蘆をゆらせり恋螢

町田 桔 梗

純

雷鳴や朝の厨に身をすくめ
齒科の窓被ひてゐたり山法師
花柘榴ぼとりと星の形して
茂り葉の包む廃屋鳥忙し
親鳥の餌をくはへて子をさそふ

日野 喜多尾 明子

おほるりの一声富士は雲払ひ
まいまいや幼の手紙クイズ付き
収穫の玉葱車庫に吊るしたる
出会して青大将の慌てやう
お別れの記帳滲めり梅雨の月

横浜 西 本 才 子

大川へ露地まつしぐら夏燕
紅睡蓮ひろがる奥に白睡蓮
薬局の軒に鉢植ゑミニトマト

池を出て人の後先通し鴨
堅穴の住居の裾や小判草

横浜 大 橋 雅 子

寒暖のなひ交ずる日日梅雨近し
会報に友の訃を知る梅雨の空
沙羅の花そは降る雨に透き通り
揺り上ぐるぶらんこの先夏の海
紫のジャカラランダの花初夏の風

横浜 山 崎 郁 子

新入生の玉入れダンス風わたる
人に慣れ駅につばくろ巣を作り
時鳥櫟大樹に身を隠し
かたつむり道に角出し横断す
野いちごを摘みたり土手の通学路

横浜 田 賀 榎 恵

白あぢさゐ夕べの空の淡さかな
梅の実の熟れてぼとりと落ちしまま
夏蝶や校舎の裏の大櫟
誰も居ぬ校舎の窓の夕焼
夏萩の咲き初めしこと追伸に

横浜 三木 豊子

夜濯やたたいて伸ばす肌襦袢
シヤボンの香うなじに残り夕端居
枝折戸へ迫る莪菜住み古りぬ
包丁に吸ひ付く羊羹新茶酌む
銀色の跡を残してなめくぢり

横浜 星野 信子

梅雨冷の蜂蜜硬し瓶の底
万緑へ雲竜型の土俵入り
朝日浴び沼尻の蓮開きけり
緑蔭のベンチに夫婦にぎり飯
太宰忌や車中の人の津軽弁

川崎 新妻 奎子

六月の空へ花嫁ブーケ投ぐ
末っ子のひとり遊びや桑葚
紫陽花の白ほつほと朝上がり
夏の波崩れて百の煌きに
葬列の動き出す時夏の蝶

川崎 大久保 進

地下街のカレースタンド梅雨に入る

ジーンズの裾を一折り五月雨るる
黒南風や野毛の酒場の昼灯り
日のすべる螺旋の手摺り夏館
峰雲や百八段の男坂
風鈴の風に始まる句会かな

鎌倉 恒川 清爾

早逝の母の墓前にカーネーション
声高し維新の志士の墓の蟬
干からびて蚯蚓路上になまんだぶ
虎が雨ぴくりと動く馬の耳
焼鳥屋時に扇で顔扇ぎ

伊勢原 佐藤 和子

高高と咲きし薔薇の名エリザベス
荒草のわが腰丈の芒種かな
棲みついて庭を狭しと縞蜥蜴
くろぐろと青葉の影や湧水池
いさぎよく散つて夕べの沙羅の花
底見えぬ水槽金魚ぬつと出づ

静岡 大村 峰子

泥塗れなる空蟬の目の光る

トランジスタラジオ茶摘の真中に
屋根を打つ雨音頻り夏炉焚く
水打ちて埃の匂ひ陽の匂ひ
ばくばくす独りの夜の大百足虫

静岡 海野みち子

万緑やダム湖に日がな浚渫船
目の合ひて仔鹿寄り来る峠道
水温む鍬鎌洗ふ外流し
茶摘女は見えず茶を刈る音ばかり
トーマスのトロッコ列車山笑ふ

静岡 宮崎知恵美

老鷺の二羽の鳴き合ふ背戸の畑
茶摘女の背の子のよく眠りをり
峠より雲に紛るる雪解富士
釣人の魚籠を覗けば河鹿啼く
墓道の真中に睨みゐる

静岡 望月敏男

ビール売る少女見上ぐるホームラン
キャンパスの緑蔭に読むゲーテの詩
炎天や牛の嘗めたる塩団子

水に透く目玉の動く目高かな
荒梅雨やシーラカンスの眼のぎよろり

静岡 藤原千代子

山寺に泳げよ泳げ鯉幟
校庭に正午のチャイム立葵
天井まで箱積み早桃集果場
風の湾磯鴨の声の張り
夏草の地に仰向きて船削る

静岡 荻野加壽子

整はぬ眉根卯の花腐しかな
古書店の親爺饒舌アマリリス
傘立てに傘の乱立美美子の忌
浜風に影の散らかる小判草
姉の忌に開く詩集や梅雨の月

静岡 小川明美

夏立つや帽深深と地藏尊
恋塚へ青条揚羽纏はるる
ひと休み本陣跡の草いきれ
花イペー移民の村の閑散と
アマリリス笛のテストに合格す

静岡 藤 本 節 子

音涼し朝の厨の洗ひ物
青梅の産毛雨粒弾きけり
急坂を登れば母校朴の花
水口にひと絡げされ余り苗
校庭の枇杷に鳥声子等の声

静岡 大 長 文 昭

雷鳴の海より陸へ沖繩忌
家壊す重機の上を梅雨の蝶
羽拔鳥鳥居の下にたかぶれる
青梅雨や米買ふ列のしんがりに
細身なる百済観音さみだるる

静岡 加 山 ひ さ 子

麦秋の真つ只中を成田線
つつが無く年忌終へたり冷さうめん
ひとすじの紅ほんのりと洗鯉
塩工場の太き煙突夾竹桃
足下に蚊遣の煙り選果場

静岡 石 川 裕 子

迷はずに捨つるヒールや更衣

選別の小屋より溢れ早桃の香
敷藁の厚きに埋もれ花南瓜
艶々と親指ほどの梅雨菌
嘴の痕今朝採るはずの枇杷の実に

静岡 本 多 ひ と み

万緑に浮かぶ漆喰壁の白
オーデコロン上着を纏ふやうに噴く
餌を持たぬ蟻の一匹行き惑ふ
土用風船の影濃き船溜り
石仏の背に涼しき瀬音かな

静岡 杉 澤

修

大南風弓なりの竿ぐいと引き
てつぺんの風にほぐるる朴の花
道をしへインクの滲む登頂誌
桐高く咲きて夕風立ちにけり
夏空や零戦模^{かたど}る風見鶏

射 水 成 瀬 真 紀 子

芍薬の万揺れ薬事研究所
新緑や雨は天地を磨き上げ
梅雨寒や膝に乗りくる猫欲しく

この先は獣道なり夏嶽
夜鷹啼く校庭の灯の落ちてより

金沢 今越みち子

六月の花嫁たりし昭和かな

孟宗竹めりめりばさつと皮を脱ぐ
行者堂に隣りてケルン雄山向く
爪立つも小石積まれぬケルンかな
赤銅に焼けて若者夏スキー

金沢 伊藤美音子

硝子戸に拭きあと残るリラの雨
丁字路で迷ふ行き先かげろひぬ
能登の塩振る飛魚の一夜干し
ほうけたる風のぜんまい砦跡
街動く如くに太鼓尾山祭

金沢 高田たみ子

菩提樹の花のかんざし純子句碑
風呂の薪くすぶる卯の花腐しかな
故郷の村は五軒に柿の花
がたびしと襖の重き梅雨じめり
敬礼で終ふる加賀鳶尾山祭

求愛の孔雀ひとこゑ青嵐
照り降りの河口一閃小鰯刺

金沢 豊田高子

謎の石辿る明日香やほととぎす
更くるほど瀬音昂る螢狩
内緒ごと増えたる少女夏蜜柑

金沢 松井佐枝子

御旅所の青竹撓ふ大漁旗
若衆の神輿を担ぐ黒尽め
巫女掃ける小幣の混じる夏落葉
忘れたる日傘を取りに象舎まで
菩提樹の花こんじきの雨しづく

金沢 石川純子

千疊の岩に磯波青嵐
祭太鼓連打の肩の波打てり
芍薬の蕾数ふる朝な朝な
電線に雀固まる走り梅雨
能登牛の売出しに列町薄暑

金沢 河野尚子

茶屋街の簾戸抜けきたる風柔らか

乳牛の群れのモノクロ夏夕日
蜘蛛の網千の雨粒つかみをり
能登つつじ被災の更地紅く染め
薔薇一輪今朝咲きたるを食卓に

金沢 道場 啓子

父の日の花束届く夫の留守
緑蔭に包帯の足投げ出せり
夕日濃し狭庭を覆ふ花十葉
ほほけたる虎杖の花雨に濡れ
梅雨空にチャイムの途切れとぎれかな

金沢 杉本 年 虹

パソコンの悲鳴術なし曹達水
ホース干す消防団やユッカ咲く
古古古米黴の噂のきのふけふ
音たてて峠を走る竹落葉
墓鳴いて峠を香るモカマタリ

金沢 南 恵子

大瑠璃や富士の湧き水あふれさせ
雲脱げよ現れて来よ雪解富士
理科室のピーカー匂ふ芒種かな

えご散れり水鳴る村の用水路
巴里祭泡の膨るるカプチャーノ

金沢 松下 信子

もう動かぬ柱時計や緑さす
裏山の鳥に草木に明易し
青山河天寿の一語過りたる
祭近し城下そここ人動く
別れ路に話は尽きず夕焼雲

金沢 北川 禮子

薔薇園の絵描き迷はぬ筆運び
キャンパスへ駆くる銀輪風薫る
絵日傘に子供歌舞伎の出番待つ
蕾なる笹百合抱へ庭師来る
加賀藩の御台場跡や花うばら

金沢 清水英理子

夜濯の小さき道着を星に干す
さみだるる切るに切れない長電話
イーゼルにランチメニューや蔦青葉
朝市に新玉ねぎの艶を買ふ
亡き人へささぐる句集初螢

内 灘 塩 井 志 津

植ゑ終はり青田見渡す独りかな
貰はれて夜泣きの子犬明易し
罹災地の二年振りなる鯉のぼり
大入りの白一色や五月場所
恙なく職退く子よりカーネーション

七 尾 谷 渡 末 枝

嬰兒を抱かせてもらふ菖蒲風呂
蝮交尾む草の褥に声発し
実梅挽ぐ姉さん被りきつちりと
解体の土間逃げ惑ふ大百足
夏至暮れて身に覚えなき脛の疵
水無月の遠の夜空を飛翔体

白 山 加 藤 美 栄 子

コンピニに並ぶ足輕夏祭
河童忌や朝勤あさじの僧の鼻長し
古古米食み喉のどうるほす新茶かな
村の児の少女と成り来星まつり
厨子ひらく四方の万緑ゆるぎなし

敦 賀 倉 谷 ます 美

松蟬や沖に灯せる貨物船
梅雨ぐもり書齋の机上虫眼鏡
釣糸に大口開けて虎魚跳ね
風薫る琅玕のみち人力車
新婚の子へとどけたし豆御飯

敦 賀 鶴 田 勝 子

松蟬や潮の香とどく殉職碑
絹莢の朝日に透ける種八つ
進水の船首すれすれ夏つばめ
おてんばの浴衣にしまふ手足かな
曾良の忌の奉灯ゆらす青葉風

敦 賀 中 川 雅 月

干物売るばてさん泣かせ梅雨曇
衣擦れの師の指先に綿の花
松蟬や氣比の松原波しぶき
伊達男浴衣の帯は貝の口
若狭浜市場に並ぶ焼穴子

敦 賀 中 村 優

豆飯の豆を除けつつ孫の匙

脳ドック月へと向ふ宇宙船
青嵐鴉たぎりて計報くる
臥す友に掛くる言葉や梅雨の月
正座して独り将棋の芒種かな

敦賀 為永香月枝

風五月プラスバンドの行進曲
浜の宿釣果の虎魚唐揚げに
子燕の糞の断り湖の駅
曾良の忌や碑表洗ふ山清水
深呼吸一つして剪る花溪蓀

徳島 福島 吉美

虎杖に粗塩まぶし漬けにけり
走り根に掃き残されし松の花
田水張る小溝堰きたる平瓦
猿の群れよぐる国道遍路行く
蕨摘む赤き前掛尾根を這ふ

徳島 村上 和義

傘寿過ぎ卒寿を目指し鰻食ふ
老いてなほ新しき棹鮎を追ふ
源流へ一筋の滝立ち上がる

貫之の歌碑の字薄れ不如帰
出征の父の面影螢の夜

徳島 宮西 修一

新緑や絵本ひろげて乳母車
葉桜の走り根太き城址かな
おちよぼ口して豆飯を喜ぶ児
雀来て南天の花こぼしけり
夫婦して方向音痴かたつむり

徳島 平岡 功

浮世絵展出てあをあと初夏の森
海峡を跨ぐ大橋初夏の風
彩雲へ繋がつてゐる花檣
平らかな室戸岬沖青葉潮
平凡に生き馳走なる豆の飯

石井 木内 マヤ

抜けがらは捨てて魂夏空へ
色水で遊ぶ園児や花菖蒲
梅雨入や猫国道を渡り切る
流れ星水平線へ突き刺さる
踊り場に百足を踏める夜の闇

小松島 岡田 あゆみ

凱旋のごとく田植機帰りけり
白百合の向き定まらぬ墓前かな
十までは数へられる子さくらんぼ
雉鳩のででーぼぼーと夏に入る
まなかひに虫ぶら下がる立夏かな

福岡 宮田 千恵子

空高く風を掴むや花櫛
姉の忌の座敷にひらく花菖蒲
七変化はじめの色は青あをと
巻尺のしゆるると春の収まりぬ
夏野菜売る朝市の博多弁

長崎 丸 本 祥 夫

国際線出発ロビーの雛飾
リラ冷えや点くまで遅き螢光灯
紫雲英田や米価高騰続きたる
姿見の鏡にカバ―花の冷え
螢火となりて父母あそびたり

西海 山下 敦 子

ちちははのと思ひだす蚊遣の香

一本の楠大樹ある夏野かな
老人と猫だんまりの端居かな
航跡のぐいぐい伸びて雲の峰
野良猫の骸埋めたり梅雨の月

宮崎 中 山 宣

竹の皮絶えず何処かで剥がれ落つ
葉種刈る刃音擦れ合ふ門前町
苔の花兎遊べる夜の薬師
鶏小屋の雨樋塞ぐ柿の花
四十雀賽銭箱に卵生む

宮崎 中 山 芳 教

産土に啼け杜鵑日もすがら
鎖樋揺るる軒先つりしのぶ
薬屋根に干木の古民家軒菖蒲
老鷺や朱色の社殿奥の闇
風に揺れ陽に溢れたる貌佳草かおよくさ

宮崎 鳥 居 達 史

当麻純供養
菩薩面取れば父ちやん練供養
薩摩路や枇杷青々と武家屋敷
シーサーの御座す古屋根棕櫚の花

廃院の門苔むせり合歡の花
「茶を飲め」ともつこすの友球磨焼酎

那覇 中 本 清

でで虫や按司存亡のくづれ垣
※按司……琉球王朝の高位
風立ちてついと流るるさがり花

六月の風の太きを磴登る
夏草や礎に刻む異国文字
白南風や望遠鏡の中に船
ゆうな咲く闇よ学童疎開船

西原 宮 城 勉

探鳥の小窓に赤し花蛭木
雲低く駆くる梅雨ばれ鳩魂碑
合掌の耳に羽風や黒揚羽
紫陽花にギヤマンの雨茅舎の忌
花柄の傘に明るき緑雨かな

豊見城 渡 真 利 真 澄

歳名園(王家別邸)五句
白鷺の一羽王家の別邸に
水漬きたる柳の枝にめだか群れ
夏ぐれの押し上げ窓をたたきけり
夏めくや識名御殿の水鏡

初蟬の声南苑に聞き止めし

（ベリ） 鈴 木 波 江
※南苑……歳名園の別称

慰霊碑に小さな聖母青葡萄
夏祭のどよめき遠く夕の橋
教会の塔の見えをり罌粟の花
土手の子が船に手を振る麦の秋
友の来て一汁三菜古茶添へて

「第二十三回万象俳句賞」速報

万象俳句賞 「尾を高く」 穂刈 照子（流山）
次 点 「一日の春野」 辺野喜宝来（那覇）
佳 作 「京ことば」 松永 博子（静岡）

詳細については十月号に掲載します。

万象俳句会

同人作品の佳句

江見悦子選

初七日の母とふたりや白牡丹
父の日の昨日と同じ夜風かな
八方のどこも正面立葵
神輿来る来るぞと人の集ひ来る
出会して青大将の慌てやう
黒南風や野毛の酒場の昼灯り
荒草のわが腰丈の芒種かな
姉の忌に開く詩集や梅雨の月
雷鳴の海より沖へ沖縄忌
大南風弓なりの竿ぐいと引き
裏山の鳥に草木に明易し
蝮交尾む草の褥に声発し
ゆうな咲く闇夜学童疎開船
花柄の傘に明るき緑雨かな
慰霊碑に小さな聖母青葡萄

林陽子
三屋英俊
穂刈照子
下嶽孝一
喜多尾明子
大久保進
佐藤和子
荻野加壽子
大長文昭
杉澤修
松下信子
谷渡末枝
中本清
宮城勉
鈴木波江

同人会だより

「風」の師欣一・綾子の句碑

前田貴美子

句友の皆さん。欣一・綾子の句碑が各地に建立されています。思わぬ身近に、遠い旅路に、訪れてみませんか。

沢木欣一

塩田に百日筋目つけ通し

夕月夜乙女の齒の波寄する

砂取り節うたへば応ふ磯鶴

撫子の花野浄土となりにけり

八雲わけ大白鳥の行方かな

遠野なる河童の皿の水かな

水浸き田の上の墓なる大納言

雉子鳴いて坐禅始まる大寺かな

剃り上げて青爽やかに能登の僧

秋山にてのひらほどの墓なるき

細見綾子

鶏頭を三尺離れもの思ふ

古九谷の深むらさきも雁の頃

でで虫が桑で吹かる、秋の風

早稲刈りにそべへが通り虹が出し

雉子鳴けり少年の朝少女の朝

木曾川を見おろして城河返る

石川県輪島市・曾々木

沖縄県国頭村・辺戸岬

石川県珠洲市・自然休養村

埼玉県秩父市・長瀬不動寺

新潟県阿賀野市・瓢湖

岩手県遠野市・常堅寺

石川県珠洲市大谷町・大谷峠

石川県輪島市・總持寺祖院

石川県輪島市・興禅寺

兵庫県丹波市・樹源寺

石川県金沢市・尾山神社

石川県能美市佐野町

兵庫県丹波市・高座神社

三重県伊賀市・芭蕉公園

兵庫県丹波市・たんば黎明館

愛知県犬山市・

ホテルインディゴ犬山

(細見綾子・沢木欣一俳句アーカイブより)

7月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

10	握る手と握り返す手螢の夜	中村 千久 (志木)
6	五十輻の貨車の過ぎ行く暑さかな	南 恵子 (金沢)
6	のうぜんの火の色闇に納まらず	神田美穂子 (静岡)
6	フェンシングのマスク外せば日焼の子	名和 政代 (東京)
5	ふる里や畳廊下の簾寝椅子	中村 千久 (志木)
5	万緑へだまの碧水放ちたる	恒川 清爾 (鎌倉)
4	生涯の写真を始末月涼し	桑原優美子 (東京)
4	真夜の夢つむぐやからすうりの花	江見 悦子 (東京)
4	図書館のシエルターめくや暑き日々	清水英理子 (金沢)
4	落日の光一条夏至の海	成瀬真紀子 (射水)
4	蓮咲くや戦火の絶えぬ水の星	下嶽 孝一 (東京)
4	兵籍簿繰れば薄つすら紙魚の痕	村上 和義 (徳島)
3	停戦と短冊に書く星まつり	加藤美栄子 (白山)
3	裏町のビストロ七月十四日	中村 千久 (志木)
3	赤多き智恵子の切り絵夏盛ん	中條 睦子 (金沢)
3	母の出す父の甚平小さかりし	丸本 祥夫 (長崎)
3	沖繩忌おばあが語る命かな	塗木 翠雲 (四街道)
3	大青田みどりの風がかきまはす	内田 郁代 (柏)
3	土手の子が船に手を振る麦の秋	鈴木 波江 (ベルリン)
3	大甕の泡盛育つガマの奥	江見 悦子 (東京)
3	梅雨の蝶舐むる地蔵の苔衣	山本とく江 (柏)
3	舫ひ船軋む波止場や群海月	柳澤 宗正 (横浜)
3	知らぬ間に猫の来てる夏座敷	中條 睦子 (金沢)
3	目鼻無きマネキンとほる梅雨晴間	山本 右近 (さいたま)

(※句頭の数字は点数を示しています)



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に「く」にがまえ（□）の付く漢字を入れてみましょう。

- 1 十^{とおだこ}□子も小粒になりぬ秋の風 森川 許六
- 2 鶏頭の十□五本もありぬべし 正岡 子規
- 3 白露の蜘蛛の□そこにこゝにかな 高濱 虚子
- 4 桐の花北□の空いつも支ふ 細見 綾子
- 5 川底に蝌蚪の大□ありにけり 村上 鬼城
- 6 枯菊を焚くにほひこそ雑草□ 山口 青邨
- 7 うとうとと炬燵の妻の□日かな 今井 つる女
- 8 戦争と畳の上の□扇かな 三橋 敏雄
- 9 巻き□くあれば手児奈の落し文 内海 良太
- 10 あえかなる涅槃□かけ尼住めり 能村 登四郎
- 11 百□を数へてづく虫の声 飛高 隆夫
- 12 秋□扇背筋正しく老いにけり 小林 愛子

【正解】

- | | | | |
|-----|------|------|------|
| 1 国 | 2 四 | 3 囲 | 4 国 |
| 5 国 | 6 園 | 7 四 | 8 団 |
| 9 固 | 10 図 | 11 回 | 12 団 |

おいしい俳句

第7回 嵐山光三郎

みぞるるやわさび醤油の焼海鰻^{あなご} 水原秋櫻子

昭和五十三年、秋櫻子八十六歳の吟。この年、十六年間つづけた俳人協会会長の職を退き、名誉会長に就任した秋櫻子は「おいしい俳句」をいっぱい詠んでいます。

雪が降って雨まじりになる（水雨）の日に、焼海鰻をわさび醤油で食べている。すりたてのわさびをつけると焼海鰻の味がぴりりとひきしまり、みぞれが降ってきたので熱燗で一杯、といったところ。

「牡蠣鍋や今宵は雪とうらなひて」も八十六歳の句で、鍋料理が好きでした。夜は雪が降りそうだから牡蠣鍋にしましょうか。食欲旺盛で、私も鍋料理が食べたくなりました。晩年の秋櫻子はふつくとした顔に八の字眉毛の好好爺だから、老いてますます鍋料理、といったところ。

「白菜鍋朝より仕込む冬こもり」。白菜は中国北部原産で、明治初期に漬け菜として日本に輸入された。昭和の白菜鍋は、ほかにいかなる具を入れたのかと推察するが、これほどはきつて仕込むのだから、シイタケや豆腐や霜降り牛肉が入った豪華な鍋だと察します。

八十八歳で没する昭和五十六年の句に「六月や生簀も出来し磯料理」があります。名句は料理より生まれる。

公益団法人 俳人協会

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞（七月号）

前田貴美子

養花天すこしこぼるる粉ぐすり 岡本敬子

「養花天」「こぼるる」「粉ぐすり」。カ行のころがる調べの軽さ。そして「粉ぐすり」のあやうさ。春に病む不安は時にはまるで安らぎでもあるかのように、作者に纏わるのだ。

「養花天」は「雲が花を養うという発想」（角川歳時記）、とある。病む作者を養う、美しい花曇の日であろう。

鳥声に朝寝の端の白みある 大内和憲

「朝寝の端の白みある」が作者の出会い、実感であるならなんと静かな豊かな目覚めの時であろう。「鳥声」に邪魔される「朝寝」の句はよくあるが、この句の鳥はやさしい。6月号の〈逃水に片足をさて入れたはず〉も佳かった。言葉の幹旋、無理のない調べの美しさ。感性の豊かな作者と思う。

初燕通しただけの空残る 高橋ひろ

何もない空である。「初燕」を「通しただけ」の、生まれてのようにそこに「残る」「空」である。言葉に無駄がない。削りとられた、磨かれた言葉が残るように、そこにはただ「空」がある。凜と響く早春の空だ。

初蝶や能登よりの人來るといふ 田中道江

やさしい調べの句だ。「初蝶」も「能登」の「人」も、親しく、そして少し哀しい。その出合いを待つ心は、この句の調べがすべてを語る。何の説明も必要としない。ただただ、読み手の心に留まる言葉。調べの美しさ。それだけでいい。

遠くより人声届く春の窓 山下良江

一人窓辺にいるのだろう。「遠い」「人声」は遠いまま、近づく事もなく遠ざかる。自分には関わりのない「人声」。それでもその声が届いた事に、人恋しさと安らぎを思う。遙かな日々を思ったかも知れない。それは「春の窓」だから。

花萼漱石の句を口遊み 内田郁代

「口遊」める句があるのは嬉しい。何げない日常に心に、隙間ができてふと「口遊」む。〈萼ほどな小さき人に生まれまし〉。そんな心になれたのは嬉しい。言葉がやさしく、今の私に寄り添ってくれるのは嬉しい。

カーテンを割り春月に溺れたる 荻野加壽子

ふと目覚めた春の夜。「カーテン」の隙間から「春月」が覗く。思わぬ明るさが作者を濡らす。「春月に溺れたる」。この言い切りがいい。「溺れ」る不安は快感でもある。このまま月の光に沈んでいこう。春の夜に「溺れ」よう。

春風や右に左に犀の耳 藤本節子

見たままを書き留めた句だ。「犀の耳」はよく動く。それ

を「右に左に」動くときと写生した。あるがままの景だ。日常の平凡な言葉が、時に新しく動き出すことがある。思わぬ輝きをもつことがある。それは作者の眼で写生し実感し、捕えた言葉だからだ。置かれるべき場所に無理なく置かれた言葉だからだ。選ばれた言葉の力だ。「春風」が何とも楽しい。

春分の黒雲開き 夫逝けり 成瀬真紀子

「夫逝けり」は、逃れることのできない現実だ。私達は、最愛の人の死を受け入れなければならない。その時はいつか来る。消えてゆく命は、残してゆく者に大事なバトンを渡して逝くのだ。そのバトンを受け取るために、真紀子さん、貴方は「夫」の死と対峙された。「春分の黒雲」が残された貴方に「開く」。愛する人からの大事なバトンを渡すために。

あたたかや我が居眠りの車椅子 今越みち子

「車椅子」に眠る自分が好き!! という句だ。「あたたか」な日差しに包まれて、今日の今が好き……という句だ。穏やかに眠る作者を抱くことができ、「車椅子」も幸せ!! と思っている句だ。

折り解く白木蓮の散華かな 谷渡末枝

北国の清潔な空から「白木蓮」の花が降る。強く願う、折りの心を落花の只中に置けば、少しの希望がいや確かに近づく明日への光が作者へ降る。「白木蓮の散華」は正に能登の折り。能登の地の、能登人の、たおやかな強さを思う。

花ミモザ一度に咲きて空真青 中川雅月

この句の手柄は「一度に咲きて」だ。咲き満ちている景を「一度に咲きて」と実感したことだ。いくたびか探して出会った言葉なのか、それとも言葉の方から飛び込んでくれたのか。この中七の言葉があるから、下五の「空真青」が現われ、そして動かない。言葉も色も響き合う眩しい句だ。

水餃子菰の緑が透けて見ゆ 福島吉美

こんな些末なことが詩になるのが俳句だ。俳句のもつ、ありあまる余白が、それを可能にする。「菰の緑」が美しい。「透けて見ゆ」がおいしそうだ。こういう句に出会えると、嬉しくなる。俳句を作るのが楽しくなる。

臘夜の青のマスクの占ひ師 村上和義

季語の「臘夜」にまず出会ったのか。「マスクの占ひ師」が先なのか。「青」はいつ眼前に現われたのか。どの一つの出会いも欠けたら、この句は完成しなかっただろう。言葉が言葉を引き合って佳き句が生まれた。

影絵めく夕日の中の徒遍路 平岡 功

出会わなければ詠めない句だと思う。「徒遍路」にも「夕日」にも寄り添う心がなければ、詠めない句だと思う。大きな自然の中に、小さな人間の迷いが願いが歩み入る。「影絵めく」は実景だろう。作者の心の「影絵」でもあろうか。

三 番 瀬

久保村淑子

初夏の地球の鼓動三番瀬
 珍しやからしら鷺に出会ひたり
 海紅豆潮満ちはじむ三番瀬
 ハンターまつしぐら海鵜海中へ
 近づきて遠のく漁船夏つばめ
 ビル街の囲む薄暑の谷津干潟
 沼風や葉ばかりとなり杜若
 押し合ひて杭の亀の子一つ落ち
 沼渡る蛇や飛び立つ番鴨
 潮入川黒鯛釣りの二人連れ



家から車を運転して三、
 四十分の所に谷津干潟がある。
 ここはビル群に囲まれて
 長方形に取り残されたよ
 うな干潟で、俳句を始めた
 頃は、句材探しに、また気
 分転換によく通った。

三番瀬は少し遠くてなか
 なか機会がなく、句会での
 吟行が初めてであった。
 広々とした砂浜は都心から
 一番近い潮干狩場でもあり、
 関東の富士見百景にも選ば
 れている。久しぶりに訪ね
 たが、広々とした差し潮の
 浜辺は心を開放してくれて
 心地よかった。

石狩野

中鉢弘一

ムツクリの流るる街や遠郭公
樺の樹液食みし蝦夷鹿落し角
葭切や大河に沿ふる石狩野
一瞬の闇動かせり青葉木菟
青鷺の粗き巢組の天に透く
隠沼に天地一転雨つばめ
てんと虫背に露ほどの日の光
秋夕焼映す大河の大曲り
闇に引く金糸一筋螢の火
潮風に原野ののすり海に向く



道都札幌は、石狩川の終着の地、石狩平野にあって、幾多の災害に見舞われながらも、先人の一方ならぬ尽力によりそれらを克服し、発展を続けてきました。

また、肥沃な原野は、植物の豊かな稔りとともに、大小の動物たちの生存と進化を促してきました。

日頃、自身への癒しも込めて近くの河川や湖沼などをよく訪れますが、そこでの生き物たちとの出会いは驚きであり感動でもあります。この機会を得た俳句との縁に改めて感謝致します。

子規と私（八）

細見綾子

本を読んだり人に習ったり、親が教えてくれたり、そういう人生もちろん貴重で大事なんですけど、それは、自分が手探りで行く実人生とは違います。また、俳句をやっている人が俳句の目で見ると実人生とはまた違います。それは、あらゆることを型にはめないで自由に見よう、いいものはいとし、美しいものは美しいと見ていこうとする、そういう強烈な、子規じゃありませんけども、子規のような強烈な精神だろうと思うのです。

私やほとんどの者は、子規ほどの強烈な精神はもっていませんけども、決して落ち込まないで、明日は違った日が来ると思い、きょうはつまらなかったなあ、と考えることができるのは、やっぱり俳句の実人生を知っているお蔭だろうと思うんです。

私は俳句を始めてからもう六十年。その間、何を俳句してきたのかなあ、あんまり長いので驚きますけれども、俳句は私の最良の道連れなんです。きょう私と一緒に東京から女の遍路さんがたくさん飛行機に乗って来ましたが、同行二人、まあ、俳句はあれみたいなもんだろうなあとは私は思ったんです。

俳句はそれだけの値打ちがあるものだと思いますね。俳句は道連れになる値打ちがある。大変短くて端的なもの

のですけど、打ち込めば打ち込むほど値打ちのあるものだと思います。

松山はいろいろな逸材がたくさん出ています。中村草田男さん、石田波郷さん、子規はもちろんですけど、こういう人を生んだところを見ると、よほどいい土地柄だったんだろうと思うんです。草田男さんも強い個性、子規も強い個性、そんな人が生まれたところを見ると、よほど個性の強いところじゃないですか。そういう感じがしています。

私も俳句をしていて、少しばかり自分を客観視することができるようになりました。自分を客観視し、自分を突き放して見ることができるようになりました。それも子規の唱えた写生説の影響をやはり受けています。自分を客観視するなんてことが、どうしてほかのことです。自分から自分を離れてものを見る。そこに本当の面白さがある。これからの俳句は、とくに写実が大切だと思うんです。

写実という言葉は昔からあったんでしょうけど、子規以前にもおそらくあったんじゃないかと思うけど、何か強い個性が出て来て、それを強力に実行してみないと、写実ということは、人の心に写って来ない。子規が、これでなくちゃならぬと思って興した写生、写実がこんなに強く私たちの心、末席にいるような、私の心にも影響を与えているかと思うと、文学の仕事というものは、素晴らしいものだなあと思います。

「子規・写生―没後百年―」（沢木欣一編 角川書店より抄出）（次号につづく）

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②

橋本 清

妹として 二人作りし 我が山斎は

木高く繁く なりにけるかも

(三・四五二)

「お前と二人で作ったわが家の庭は、木々が随分高く生い繁ってしまったなあ。」

天平二年(七三〇)十二月、大宰帥(大宰府の長官)大伴旅人が任を終えて上京し、帰宅して作った挽歌三首中の第二首。

在任中、旅人は現地で妻を亡くしました。三年ぶりに見る庭の木々が伸び放題に伸び、すっかり荒んでしまった有様を目にしていると、一緒に手入れする妻はもういないのだという感慨がこみ上げてくる。この歌の前にある「人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり」のように「苦しかりけり」と、感情をそのまま訴えず、事物の変化した有様を述べているだけです。しかし、それがかえって胸を打つ。

いのちなき砂のかなしさを

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

(二・握の砂)

と、啄木が歌っているように、人間の意思にお構いなく変化・流動するものに、人は自らの感情を見出すことがあります。

み立たしの 島の荒磯を 今見れば

生ひざりし草 生ひにけるかも

(二・一八二)

「お住まいになっていた島の宮殿の園池の磯を今見ると、以前は生えていなかった草が生えてしまっていたではありませんか。」

持統三年(六八九)、天武天皇の第三皇子草壁皇子が十八歳で亡くなった時、その宮殿に使えていた舍人達が作った挽歌二十三首中の一首。「島」は飛鳥の地名。主を失った宮殿の庭が次第に荒廃していく様に、その場所から永遠に不在になってしまった人を悼む気持ちを見出しているのです。

『古今和歌集』の哀傷歌から一例を挙げましょう。

君が植ゑし一むらすすき

虫の音の繁き野辺ともなりにけるかな

(古今十六・八五三)

前書によると、御春有助という人が、以前仕えていた人の亡くなった後、その人の曹司(役人の部屋)に、ある秋の夜更け、久しぶりに立ち寄ってみると、前栽がひどく荒れていた。故人が風情あるように植えた一群の薄がすっかり生い繁り、まるで野原の様になり、虫がうるさく鳴いている。親しく仕えた人の人柄を懐かしむ気持ちと、その人の丹精込めた前栽が荒れ果てているのを痛ましく思う気持ち。そんなやるせない思いが、風物の変化に対する感慨に込められています。



魔法の消しゴム

武蔵村山 松井宣夫

あれは高校生の頃でした。友人と歩いていると道に一本のスプレー缶があった。中身はまだ充分。何気なく手に取った私は近くの壁に落書をして友人に「どう？」と尋ねると「字が間違っている」との指摘です。よく見ると短いセンテンスなのに2か所も誤字です。推敲が足りなかったようです。翌日からクラスでは誤字の多い落書が話題になり他校でも噂になっていたとか。幸いにも犯人が私とは気付かれていないようです。

その後落書は何年も残り、通行人のもの笑いの種になっていました。いつまでも消えない落書に「行政は何をや

っているんだ」と野党議員の気持にもなりましたが、あの時に魔法の消しゴムがあれば、落書はすぐに消すことが出来たでしょう。

バタフライエフェクト消しカス

静岡 杉山千鶴子

消しゴムは1770年に英国で作られたのが始まり。それまでは食パン(消しパン)を使用していたそうです。私が在職時、久しぶりに中学1年を担当した時、直ぐに不思議な光景に出会いました。授業で出た消しゴムカス(消しカス)を手で集めて小さな袋に入れて机の中に仕舞う仕草です。同じ小学校からの生徒たちは、皆同じ事をしていました。他校からの生徒たちは消しカスは床に落とすかそのまま。私の学生時代も後者。

生徒に尋ねました。小学校1年の時の先生の御指導が身に付き、学年から学校へと広まり、いつしか学校の自慢の一つとなっていたと。実に些細な事から始まり集団の自慢へと。「バタフライエフェクト消しカス」中学でもそれを取り入れました。「使った物への

恩返し」と生徒会が命名。消しカスアートもありました。因みに消しカスは不燃物なのです。

主役？

金沢 井端久子

テーマ「消しゴム」の原稿依頼が届いた。えっ、消しゴム？って……。全く意識のなかった消しゴム。改めてテールの上の消しゴムを見る。黒ずんでいる。何時も5、6本の鉛筆と一緒にペンケースの中なのでいつの間にか鉛筆の芯の色になったのである。汚れた部分は薄く削ってというのも面倒なので、その時はそばにあったセロハンの袋を小さく切り、消しゴムの袋としたのだがなかなか汚れは取れない。考えてみれば消しゴムには本当にお世話になっている。昔は消しゴムの滓は吹いたり払ったりしていたが、何時の頃からか手で掻き寄せている。鉛筆の脇役のような感じだったが、私にとって正に主役の存在かもしれない。今もこの原稿の下書きの側でデンと控えている。少し考えさせられたテーマであ

消しゴムの効用

新潟 佐藤幸示

字を書くのが不器用な私には、消しゴムは必需品であった。絵の時間には必死に消しながら描き、表面が黒くなったことを思い出す。それに男子なら誰でもやった何かに当てる遊びも楽しんだ。又、高校の時、授業中に居眠りをしていた、先生から消しゴムが机に飛んできて、吃驚したこともあった。

俳句の会に入ってから、消しゴムが付いている鉛筆を重宝に使用したが、今はボールペンを使用しており、ご無沙汰している。

最近消しゴムハンコというのが流行っているらしく、ここ数年は、美しい消しゴムハンコによる年賀状を義姉から頂いている。女性らしく様々な花や形やデザインで埋められており、新年の楽しみである。義姉の益々の元氣と長寿を祈っている。

チビた消しゴム

静岡 大長文昭

手元にバチンコ玉より小さなチビた

消しゴムがある。この消しゴムはずっと愛用していたものだ。

私の小学校入学は、昭和20年4月の戦争中だった。この年の6月20日の早朝、静岡大空襲で、B29が焼夷弾を雨あられの如く落とし、市街地の全てを焼き尽くした。幸い我が家は田の中にあり、焼夷弾の直撃を受けず無事だったが、周辺の家は殆どが焼けて悲惨だった。小学生の私は母の郷へ一人疎開に出された。蜜柑と茶の郷で戦争の影は長く長閑な村だった。祖父は漁の好きな人で、ある日「今日は置き針に行くぞ」と言われてついて行くと、針先にミミズをつけ淀みに刺して行った。翌朝引き上げに行くと鰻が何本か捕れ、この漁は面白かった。夏休みの宿題の作文にこの事を書き、早速消しゴムの登場だ。

長じて就職は事務仕事、愛用のチビた消しゴムは今も手放せずにある。

消しゴム

静岡 加山ひさ子

消しゴムは鉛筆で書いた文字を消す時に使う物だが、小学生の頃の消しゴ

ムはあまり消えなかった。消えないため何度も擦っていると紙が破れテストの時に慌てた記憶があり、紙に優しくないと思った。

プラスチック製のよく消える消しゴムが普及し出すと、色鮮やかな物、香り付きの物などが文房具店に溢れ出した。女子に人気な物は「香水消しゴム」で、お小遣いで色々買っては学校で見せ合う楽しみがあった。

今、愛用の消しゴムは鉛筆メーカーの白色でよく消えるもの。もう何年も同じものを使っているが、プラスチック製の為、「字消し」と言うそう。

「万象ノオト」投稿募集

▽1月号「車」(9月末日締切)

▽2月号「コンビニ」(10月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市市広見東本町14-14

神田美穂子

北から南から

荻窪三庭園を訪ねて

東京 下嶽孝一

東京支部は今年発足10周年を迎え、東京俳句スクールでは4月8日、荻窪三庭園を訪ねて吟行会を行った。

太田黒公園・音楽評論家太田黒元雄の屋敷跡で、樹齢百年以上の銀杏並木と日本庭園や池・四阿がある。紅葉の名所で、亀や鯉の棲む池や橋にかかる青楓が綺麗だった。洋館にはロンドンから運ばれたグランドピアノがあった。

荻外荘公園・昭和戦前期に総理大臣を3度務めた近衛文麿の旧邸。昭和15年戦争開戦路線の方針を決める「荻窪会談」、さらに太平洋戦争開戦開戦の昭和16年には「荻外荘会談」が行われた客間が当時のまま遺されている。



角川庭園・角川書店の創業

者で俳人の角川源義氏旧邸跡。庭には四季折々の草花が植えられ、水琴窟の心地好い高音が鳴る。書斎には掛軸と源義自筆の展示がある。第四句集前書に「昭和46年俳人協会会の金沢吟行に沢木欣一と出席、のちに能登へ向かった」とある。

茶室で庭を眺めながら、幹事の御点前で薄茶と菓子を楽しんだ。床の間には、細見綾子先生のへふだん着でふだんの

心桃の花の色紙が掛かっていた。

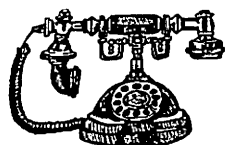
句会は「幻戯山房」内の詩歌室が会場となった。出席者12名の吟行句と、欠席投句者の雑詠を以下に紹介する。

鯉の池巡ればこほれ花楓
文麿の龍の天井つじ咲く
真青なる空をくすぐり青かへで
鯉と餌を争ふ二羽の残り鴨
春うらら手を取り歩む老夫婦
春昼や茶釜の滾る四畳半
老木や命のバトン薬に
池底の玉石の美し残る鴨
池の辺の四阿被ふ花楓
飛石の続く柴折戸濃山吹
走り根の上を走り根水温む
雨あとの土の匂ひや春深む
永き日の関守石は陽を弾く
葉桜の風や遅刻の子の走る
春耕の足跡深く夕日沁む
芍薬のどつと咲き早やくたびれぬ
重なりて葉音やさしき青楓
先触れの太鼓の地鳴り夏祭
夏蝶の野川を越ゆる力かな

江見悦子
広瀬俊雄
吉中愛子
下嶽孝一
藤田裕子
宮崎正義
久留島規子
松井宣夫
桔梗 純
小池清晴
坂本具子
一由久美子
島野ひさ
名和政代
草間三香子
岡村純子
喜多尾明子
植村康子
高尾早弓
疋田華子

万象作品

江見悦子選



○は佳句に選ばれました。

めだか飼ふ床屋の主ピアスして 金沢 井端久子

○恐竜の町の棚田の麦熟るる
緑雨垂る火牛の像の筋骨に

画材屋の片隅に売る夏野菜

田左衛門狸の祠植田べり 小松島 田上幸子

○草刈機充電中の三尺寝

肉厚の夫の爪切る籐寝椅子

豆腐屋の水音弾む立夏かな

学童の遠まなざしや草螢 那覇 辺野喜宝来

橋渡る人ゐて虹の消えにけり

○一番星夜店を一つを灯しけり

小満の風入れ夫の忌を修す

四阿を緑雨の音の包みたり 静岡 松永博子

風摺むごとく河鵜の羽広ぐ

○観音の指のしなりやカーネーション

青蔦に呑み込まれたる古館

梅雨の庭石の紋様くつきりと 燕 渡辺志ま

ビニールの袋走るや青あらし

○生返事しつつ縫取り梅雨深し

走り梅雨うどんの汁のたつぷりと

空広き関東ローム春キャベツ 金沢 松田好子

○揺蕩うて花藻流れに逆らはず

禊場になんちやもんちやの落花浴ぶ

墓傾ぐ寺の牡丹の咲き乱れ

朝の日に菖蒲の花の真むらさき 焼津 小梁洋子

○梔子の風の路地より抜けてきし

白シャツの自転車列朝来る

ジェット機が傷つけてゆく夏の空

羊蹄山の麓を抜くる青葉風 札幌 石田 睦

夏服の背中にポニーテール揺れ

洞爺湖畔結葉の下駆け抜ける

万緑を分かちて天へ続く道 島崎 洋

リラ冷えやベンチに残る夜半の雨

濃き淡き紅の絨毯芝桜

夏山に釣り人ひとり夕間暮れ 杉山 和廣

ゆるやかな放物線や夏来る

蝸牛けんかの後の帰り道

山翡翠の遠鳴き響く千歳川 杉山 鈴子

靴底を浮かして通す蟻の列

野の花に六月の墓地抱かれをり

風折れの梅に添へ木の確かなる 札幌 園田鶴子

翠苔の岩にまぎるる青蛙

軽鬼の子をつつむ光のやはらかき

○絶え間なく柳絮きらめく水の上 竹重富子

石狩の風みづいろに亜麻の花

青鷺や水路の橋の暗がりに

裏山の木に登る子等さくらんぼ 田邊政代

隠沼の白蓮に来るにはか雨

石狩川の渡船場跡や雲の峰 土門 一平

注文は二次元コード明易し

飼猫のめげずに狙ふ夜の蠅

五月雨や雀三羽と雨宿り 土門 一

長話レモンソーダの泡消えて

通院の道涼風の通り過ぐ

玉ねぎを刻めば涙カレーの日

雨うけて紫陽花の径去りがたし 船橋明美

胸躍るよさこいソーラン夏はすぐ

待合せ鈴蘭揺るる花時計

リラ冷えの街に流るる夕の鐘 八代洋子

母の忌にあぢさゐ一枝供へけり

○音に咲き音に消えゆく大花火

○暮れてなほ機械の音や早苗月 新庄 曾野部礼子

山裾に見上ぐる先の桐の花

鈴蘭の鈴振る音や風の中

いつの間にか眠つてしまふ花月夜 大江 安藤桂花

雨蛙さあ鳴くぞてふ面構へ

新緑や水のボトルを五六本

七つ森の七座つなぎて踊子草 仙台 富田洋子

寄せ墓に若竹の風やはらかし

裏山の風入る厨梅漬くる

擦れ違ひ出来ぬ農道芒種の日 新潟 齋藤 信

予備校の駐輪場に夏燕

夏めくや下校の列の長くなり

通勤の脳をさませり街若葉 佐藤幸示

新しき墓に張りつく青蛙

草むしり手の緩みたる小さき花

阿賀大河に舫ふ漁船やあいの風 榊原キヨ子

藤波や文字かすれたる小さき句碑

藤豊か茶屋にコーヒー香りたる

午後の便待つ棧橋や花あやめ 高塚先子

駅出でて葉桜並木音の無く

欄干の錆びつき川はあをみどろ

角けづり転がる果ての石涼し 新潟 山田季聴

穂仕度の青田窺ふ雀かな

きつね雨止み一斉に雨蛙

母思ふカーネーションの届きたる 芳賀 稲川清子

メロン買ふ食べ頃のメモ添へられて

庭の猫目掛けて燕急降下

竹落葉さらひ熊手の爪休め 福武幸子

苔むせる地藏緑雨に潤みたる

実梅落つ跳ねて弾んで転がりぬ

堀浚ひ終へて代掻く水満たす 鹿沼 渡辺利子

蒼空の青の広がる植田かな

スイートピーの香につつまれて立ち話

○図書館に新聞めくる音涼し 栃木 飯塚キミ

銀いろの雲の横たふ夏の嶺

遮断機や今を盛りの栗の花

十年目の金魚の命薔薇の花 佐野 木村君子

のうぜん庭の定位置溢れ咲く

警備員の朝の挨拶立葵

爆音のジェットスキーや利根川の夏

佐野

義本美智江

緑蔭に高き金網孔雀鳩

岩清水しぶく家鴨の羽繕ひ

万緑や鬼神封ぜし剣桂

志木

汐見克彦

春霞見え隠れする逆さ富士

行く春を異国の人と露天風呂

梅雨晴間茅葺き屋根に湯気灰と

森山洋之助

オカリナの路上演奏風薫る

入梅や鬱といふ字を書いてみる

神宮の森に品良き花菖蒲

新座

多田英治

葉桜も良し向ひ家の桜の木

出ぬ声で妻呼ぶ梅雨のベッドかな

父の日や定年ののち輝きて

千葉

高田みや子

畦道のけぶる越後や梅雨に入る

百歳を看取りし嫁や海芋咲く

泥濘にタイヤ軋めり椎の花

酒々井

小林あけみ

○壱道へ花椎の雨匂ひ立つ

小流れへ青葉時雨の波紋かな

幼稚園バス発てば揺れ花柘榴

佐倉

新谷八郎

分蘖し田圃しつかり梅雨晴間

万緑や家を毀してまた建てて

花冷や母の形見の桐の下駄

佐倉

有泉正夫

戒名も遺影も要らぬ竹の秋

親爺似のうしろ姿や花ざくろ

新緑の雫輝く雨上がり

○風強し雨のごとくに夏落葉

杉の幹覆ひ尽くして蔦青し

銀輪の背は五月の風受けて

樹々はみな五月の匂ひ森を行く

○風立ちて翳る水面や若楓

子らの声一音高し夏来る

更衣スクールバスに白あふれ

鉄骨の錆びし足場や薄暑光

個展出て街行く空に鯉のほり

わが庭に勿忘草をみつけたり

遠浅の海辺でひろふ桜貝

初夏の旅夫の遺影を胸に抱き

船橋

近藤澄子

風鈴のやさしき音や昼下り

夏落葉あまた隣の公園に

どくだみの我が物顔の白さかな

山口秀吉

ほととぎす特許許可局久しぶり

新緑や木々の太りて森太る

天然水うましうましと母の夏

カフスボタンとれしワイシャツ梅雨寒し

這ひまはるかばちやの花を囲ひける

○山法師木陰に本の忘れもの

海臨む椰子の樹の揺れ走り梅雨

さらさらの砂浜伊豆の海薄暑

藤椅子の籐の軋みに馴染みをり

湯上がりや名峰富士の古団扇

梅雨寒や瞳つぶらな縫ひぐるみ

老幹にくれなるの影八重桜

緑蔭や血洗ひの池ひっそりと

楊梅の灰汁残りたる指と口

青葉風夜来の雨を振り落とす

黄昏のオカリナの音や麦の秋

満天の星や雪溪横たはる

青空の白雲まぶし今朝の夏

せせらぎの音やはらかし山若葉

麦秋の波打つ畑や遠筑波

柏

鹿毛満子

村田由美子

松戸

石川幸子

菊岡緋路

寿多映子

渡部洋子

雨三日青田いよいよ力増す 市川 奥澤よし江

○その細身どこにはねあるあめんぼう

七変化色を定むる今朝の雨

背伸びして給ふ実梅の十二粒

東京

安藤美酒々

切り揃へ一皮剥けるらつきよ漬

蔵の前十葉の苞星のごと

雨上がり光を放つ白つつじ

大師さま見事な藤を育てたり

藤の花紫色の重さかな

若葉雨老い譲り合ふバスの中

燕木静子

母の日に届く花東ウイスキー

新川に若葉あふるる明日もまた

生粋の江戸つ子神輿かつぎたり

北口富栄

友は古稀七十本の薔薇の花

糸瓜苗に想ふ子規庵子規のこと

長靴に飛びつく蛙田の帰り

齊藤孝夫

蛙乗せ仕事終へたるトラクター

三社祭法被の柄を競ひ合ひ

ど忘れの名前に眼鏡ふく薄暑

花籠に四葩を加へバースデー

高野翠子

風薫る卒寿を迎へマニキュアを

東京

中澤桃子

水やりの前へ前へと夏の蝶

梅雨湿り靴の中に楽譜あり

山登るシャワーのやうな雨浴びて

紫陽花の道をゆづれば雨雫

校庭にとりどりの傘梅雨に入る

紫陽花の荒ぶる雨に競ひたる

花心へと渦巻く翳り紅薔薇

爪程の銀杏若葉のさんざめき

一人づつ渡る吊橋青嵐

○祭馬の糞取る舍人しづしづと

寺庭は風の中なり紫蘭咲く

新しき宮の鈴の緒余花明り

エプロンに手を拭き仰ぐ柿若葉

薔薇の雨入場券を濡らしけり

立葵ポスト埃にまみれたる

七夕の願ひ数多や笹の揺れ

はや打てる祭太鼓や神楽坂

米不足代田の水のたつぷりと

どくだみの実家の庭を覆ひたる

娘より妻に届きしさくらんば

東京

宮崎正義

渡り蝶離れぬ風の藤袴

蓮浮葉滴ころころ光りをり

薔薇園に車椅子押す父一人

ひと刷毛の余花やアルプス雲の上

初蝶や球を追ふ子の立ち上がる

○紫陽花に濡れ全校の大掃除

重なりて葉音やさしき青楓

○友の背のちさき曲りや手毬花

若き日の母の姿見沙羅の花

夏旺ん吊橋を子の駆け抜けて

SLの汽笛の訝万緑裡

○えごの花沢音に沿ひ風に添ひ

城跡の礎石はなれぬしじみ蝶

母の日の小さき花束幼より

夏の陽や榎の大樹傘となり

色褪せし母のハンカチ海の青

十葉やガーデニングの役に

つひに来し蠅一匹と戦へり

矢車や油の臭ふ町工場

日野

松原悦子

長谷川はるみ

長谷川信也

橋本紀代子

馬場美智子

平子甲奈

前川 昇

高尾早弓

三鷹 植村康子

調布 荒井 仁

南場雅子

府中 竹村晃子

手のひらの花種回し立ち話

武井山

松井宣夫

改札に焼柴螺の香三崎駅

大西部行けど行けども麦の秋

竿竹屋の荷台を叩く走り梅雨

横浜

大駒泰子

五月富士ふはり裾野に落下傘

お目見得に庭一巡り揚羽蝶

岡 元枝

新しき糠床まづは紫紺茄子

たをやかに小川の岸辺額の花

百合開き子の誕生日近付きぬ

南天の花の盛りや雨の路地

岩燕身を翻しせせらぎへ

岩風呂に最後のつつじ残りたる

隠沼の老鶯しきり谷戸暮るる

鳥たちの下り立つ庭や冬館

冬服の重なるソファ猫ねまる

早春の郵便受けに日のあたる

坪庭に香り漂ふ沈丁花

人影にちりちりとなる蝌蚪の群れ

無人駅の降車は一人春ともし

豊 美佐子

通学路銀杏並木の芽吹きけり

並木から花びら一枚ペランダへ

さつき雨わづかに揺るるそよこの木

ままごとのシートの上に散る桜

横浜

豊 美佐子

五月闇つがひの鳩はベンチ下

朝桜ビルの谷間の喫茶店

紫陽花の青極まれる姉忌日

川崎

横山ユキ子

万緑や裾ながながと男体山

踏切に大きく揺るる小判草

産土の森に郭公風わたる

茅ヶ崎

久保田富士子

実梅落つ庭猫ひよいと身をかはし

○修行僧素足はみだす下駄の音

○れんげ田へ少女ふはりと座りたる

伊勢原

山本カツ子

陽炎や一氣に跳び越す水たまり

山裾の光の波や麦の秋

山肌の風呑みこんで藤の花

松田

古谷悠紀子

新茶汲む残る滴も振り分けて

ピザ食べに茅花流しを老夫婦

十薬の弘法の井に映りをり

静岡

飯田優子

○測量器覗く女に素馨降る

夏芝居格子戸閉ちて小昼時

シャーペンのぼきぼき折れる桜桃忌

額の花泣きだしさうな雲の来て

伊東文恵

銀座てふ商店街のあつぱつば

新聞の兜を被る菖蒲の日

静岡

海野俊彦

水玉を乗せ蜘蛛の巣の揺れにけり

新緑や遙か眼差す栄西像

香具山と畝傍消し去る白雨かな

水雨打つ芭蕉の句碑や寺の跡

ほととぎす嫗一人の峠茶屋

鉄線花隣家の垣に蔓伸ばす

診察を待つ窓の外青嵐

生臭き勝手の朝や走り梅雨

海亀のゆるり浮きをりマウイ島

恋塚の風にたはむれ紫蘭かな

陣屋まで道案内の黒揚羽

天を衝く神杉老鷲したがへて

○河鹿笛宮の棚田に風走る

万博へ校外学習汗光る

緑摘む八十路の友の声若し

若竹に雲の迫りて雨近し

残鶯や耳押さへたる羅漢像

藤房の香り届ける池の端

推敲の頬をくすぐる若葉風

杉田義則

杉山千鶴子

杉山巳代

高井明子

高橋一夫

田中秀幸

菖蒲湯や半寿を祝ふ伊豆の宿

のどけしや麒麟の目玉まん丸に

静岡

内藤允昭

枝揺らしては青梅を落としけり

葉桜や濠の水面の揺らめきて

山芍薬堅き蕾を支へ立つ

天辺の光まばゆし五月富士

○短夜や癖字読みとく古手帳

細波を分けて首出す川鷄かな

蕉風や厨の壁に藁草履

高札場に定め八枚夏兆す

くちなしや宮の闇夜のみちしるべ

紫陽花に地蔵の顔の隠れたる

梅雨晴間リユックの子らがバスを待つ

裸婦像のどつしりと座す青葉闇

逆上がり足を揃へて夏に入る

石山寺擬宝珠の奥の椎若葉

梅雨ぐもり駅のホームを鳩一羽

青梅雨や足場を外す音ひびく

薄暑光跳ねる園児の黄色帽

句帳手に見上げてゐたり青楓

掛川

鈴木美由紀

十葉の弘法の井を囲ひたる

親燕泥を継ぎ足す宿の梁

川崎

鈴木裕一

円卓の筍飯を大盛りに

軒下はペンキ塗り立て燕来る

○デイケアの帰路の窓外花万朶

金沢

上野富貴子

昭和の日激動の世を生きて今

裾分けの筍飯のよき加減

正客は若き人なり夏茶の湯

北野陽子

梅雨寒の庭をながめて座りをり

短夜やあの日この日を思ひ出す

放たるる犬のひと跳ね青田風

新出祐子

薔薇の香や薔薇の風ふと左より

山裾に幼き声の時鳥

大海の潮引き合うて春満月

菅原雅子

○早乙女の指しなやかに水くぐる

クローバー道草の子等額寄せ

○夏きざす堰をきらりと稚魚の群れ

田上なつ子

郭公の声降る大樹見上げたり

蕉風や檻のライオン深眠り

武者人形飾る座敷や女人講

廣田宏美

○風涼し茶店の奥の蔵座敷

湯殿から中庭見えて著莪の花

金沢

宮崎恵美

青好む乙女のサマードレスかな

お茶席に友から届く額の花

禪寺にこぞりて立てり松の芯

かほく

能任康子

風薫る声掛け合うて草野球

見渡せば雨後の校庭緑さす

亡き人の思ひ出を追ふ春の夢

白山

朝倉みゆき

幼子の眠り見守る小さき蚊帳

温顔の大関優勝五月場所

小さき口広げ大鳴き燕の子

鶴尾正江

夏場所の紙面賑はす郷土力士

尾を振つて走りくる犬風薫る

眠られず寝返りばかり明易し

敦賀

川口和代

退院の心やすらか豆ご飯

茶の葉噛む父の横顔五月晴

松蟬や虚子の碑たずね松原へ

四日市

藤原善明

つばめの子駅のピアノと輪唱す

夏雲雀落つる自由に身を任せ

春夕焼防災無線テスト中

徳島

林 早苗

ピアノ弾く小さき指先風光る

徳島

林 早苗

○断捨離や妣の浴衣を陰干しす

春夕焼西はほんのり桜色

徳島

山本晴美

米騒動田植手伝ふ米屋かな

昭和の日万国博の人だから

山本瑤子

雨だれや春人参のジャムを炊く

吾のまはり即かず離れず黒揚羽

哀しみの裏は喜びチューリップ

松山

入河大河

○金縷梅に風の蠢く音したり

白雲の縦横無尽燕来る

福岡

鶴田輝代

真つ直ぐに玉巻く芭蕉青空へ

呼びかけに亀勢揃ひ薄暑光

大宰府

美山留唯

草花の思ひ出語る聖五月

夕刊に明日の運勢夏に入る

六根浄の掛念仏や雲の峰

那珂川

高山ひさ子

まだ続く掘削の音花棟

水無月やテレビの叫ぶ古古古米

烏賊洗ふ手に吸盤のくつつきぬ

門川

請関ゆかり

校庭を包む青き香栗の花

門川

請関ゆかり

嫌なこと嫌だと言へず豆の飯

肋木に子らの手作り鯉のぼり

国富

山口孝治

緑蔭に立つ犬猫の供養塔

電線に並ぶ子燕餌を待つ

吟遊の波音に濡れ伊集の花

那覇

稲嶺有晃

豆飯を祥月命日の母へ

戻らないソファの凹み夏帽子

首里杜へ雲の流るる若葉雨

大城末治

慶良間まで皐月の海の晴々と

小桜の塔へ夏蝶真つ直ぐに

病院へ常の坂道花福木

沖縄

高嶺谷道

信号の影に女の単帯

行幸の島の祈りや大南風

朝虹の消えゆく方へマスト立つ

宜野湾

宜野 顕

捕虫網まづは兄より試し振り

○夜濯の漢が干せる妻のもの

春惜しむ雨の古町歩きゐて

ベリシ

森尾 舞

ポート漕ぐ掛け声遠く信濃川

サングラスに見る江ノ島に塔ひとつ

俳句

9月号
予告

8月25日発売

予価1,200円(本体1,091円)◎

巻頭作品50句 高橋睦郎
作品21句 西山睦・佐怒賀正美

特集

躍動する動詞

●動詞の手強さ・難しさ ●季語と動詞の関連性
●動詞の可能性 ●鑑賞 動詞が光る俳句

特別鼎談

生のことば

農と俳句

太田土男×若井新一×鈴木牛後

好評連載

小林秀雄の眼と俳句……………青木亮人
飯田龍太の世界……………廣瀬悦哉
俳句の水脈・血脈……………角谷昌子

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

最近の名句集を探る

大木あまり『山猫座』

朴美代子『母』

大井恒行『水月伝』

高橋睦郎

特別作品40句

●巻頭3句

中原道夫／仙田洋子

木暮陶句郎／長浜 勲

二上貫夫／土屋みさ子

●今月の季

石田郷子＋黒岩徳将

●俳句と短歌の10作選

甲斐のぞみ＋遠藤由季

●4月のハイライト

「天為」創刊35周年 他

●師と弟子、弟子と師

佐怒賀直美 沼尾將之

●四季吟詠選者鑑録新作10句

夏井いつき／佐藤文字

足立賢治／松尾隆信

水内慶太／米田規子

行方克巳

筑紫磐井・司会

大西朋

後藤章

野崎海幸

●好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳句鑑録

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

俳人の働き

俳句へのまなざし

大西朋

井上泰至

俳句の時節

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

古典箱を旅する

富田重三郎の手掛けた

本の図鑑を掲載

藤村公洋

俳句のつまみ

堀田季何

諸家也架

二ノ宮一雄

一留百里

俳句四季

Haiku Shiki

2025年9月号

8月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒169-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

万象作品の佳句

江見悦子

恐竜の町の棚田の麦熟る 金沢 井端久子

恐竜王国と呼ばれる福井県では恐竜の化石がいくつも発見され継続的に発掘が続いている。中でも勝山市は「恐竜の町」として有名で、県立恐竜博物館を訪れる人が多い。そんな町にも棚田が広がり、ちょうど麦秋を迎えている。

億の単位の昔、日本列島が大陸の一部であった時代に恐竜がいたというわくわくするような場所に根を張った人々の暮しを詠んだ句。太古からのロマンを思わせてくれた。

草刈機 充電中の三尺寝 小松島 田上幸子

「草刈機充電中」が面白い。手作業で草を刈っていた昔と比べれば、機械を使えるようになった今は随分楽にはなったが、暑熱の中の作業はやはり重労働だ。ちよっとひと休みと横になって、この後はまた作業に戻るのだ。助詞の「の」以外を漢字表記にしたことが成功した。

一番星夜店一つを灯しけり 那覇 辺野喜宝来

日没後、空には宵の明星が輝き、下界では一軒の露店が明りを灯している。縁日だろうか、ぼつぼつ人も出始めている。作者の視点は夜空と地上を行き来し、それは影絵の世界のようでもある。詩情溢れる童話の世界を詠んだ一句。

観音の指のしなりやカーネーション 静岡 松永博子

観音像とカーネーションの取合せに意外性がある。法隆寺の国宝百済観音の姿を思い浮かべた。左手を垂らし、3本の指で水瓶の首を軽く抓んでいる長身の観音像に一茎のカーネーションを持たせたら、と想像した。「指のしなり」に焦点を当てた品格のある句。亡くなられた内海良太名誉主宰の〈空也像口の中よりフリージア〉を思った。

生返事しつつ縫取り梅雨深し 燕 渡辺志ま

「縫取り」は刺繍のこと。梅雨の長雨が続く日、刺繍に余念がない作者。家族の呼びかけにも生返事。梅雨に降り込められて得られた、幸福なひとときを詠んだ。

揺蕩うて花藻流れに逆らはず 金沢 松田好子

街中を流れる川、或いは水路の、かなたこなたへゆらゆらと動いて定まらない藻の花、その光景を「流れに逆らはず」と表現した。束となって揺れている水草の小さな藻の花が慕わしい。素直な美しい写生の句。

梔子の風の路地より抜けてきし 焼津 小梁洋子

路地を吹き抜ける風は案外と強いもの、その風が梔子の香りを運んできた。瞬間の驚きと感動を詠んだ。

暮れてなほ機械の音や早苗月 新庄 曾野部礼子

「機械の音」とは田植機の音だろう。辺りが薄暗くなっても一日中続いた音はまだ止むことがない。曾野部さんの住む山形県新庄の五月は、まさに「早苗月」である。

その細身どこにはねあるあめんぼう 市川 奥澤よし江

「その細身のどこにはねがあるというのか、あめんぼうよ」あめんぼうをじっくりと観察写生し、あめんぼうが飛び跳ねている姿を「ばねある」と、リズムよく詠んだ。

友の背のちさき曲りや手毬花 東京 植村康子

「手毬花」はおおでまりのこと、紫陽花に似ていて真白なボール状の花を咲かせる。この句、久しぶりに再会した友の背がそのことには触れないまま友と別れたに違いない。「ちさき曲り」に思いやりと優しさがあがり、清らかな「手毬花」との取合せが成功した。

祭馬の糞取る舎人しづしづと 東京 長谷川はるみ

祭は四季を問わず行われるが、俳句で祭と言えば夏祭。この句、「祭馬」が登場するところから糞祭だろう。威儀を正した行列に36頭の馬、その馬の糞を集めるのは括袴をはいた舎人役である。その場面に目を留めた作者は、舎人の足取りを「しづしづ」と詠んだ。おごそかな行列と馬糞を集める舎人役との面白い対比。俳味たっぷりな句に仕立てた。

紫陽花に濡れ全校の大掃除 岡布 荒井 仁

今日は生徒全員で行う一斉大掃除の日、校舎内は勿論のこと、生徒たちと一緒に校庭のごみを拾い雑草を引く。昨夜の雨が残る紫陽花の雫に濡れながらの作業だ。実感のある省略の効いた句。これからも仕事の句を沢山詠んで下さい。

短夜や癖字読みとく古手帳 静岡 中澤祐一

「古手帳」とは誰の手帖なのか、亡くなったお父上のものかもしれない。ふと思いついて、しまっておいた手帳を読み

始めた作者。癖字に悩みながら読み進めて行くうちに、いつか夜が明けてしまった。「癖字」という表現に手帳の持ち主への親しみと懐かしさを思う。季語「短夜」が生きた。

断捨離や疵の浴衣を陰干しす 徳島 林 早苗

「断捨離」という言葉が日常的に使われるようになった。物が溢れている現在、身軽で快適な暮らしを手に入れるために、不要なものを捨て、物への執着から離れる考え方だ。作者もそれを目指しているのだが、着ることのなくなった「疵の浴衣」は処分できずに、今年も陰干しをする。亡くなったお母様の思い出の浴衣なのだろう。「断捨離」も簡単ではない。

金線梅に風の蠢く音したり 松山 入河大河

寒さの残る早春、他の花に先駆けて咲くことから、まず咲く、それがなままと呼ばれる花は、線形に縮れた黄色い四つの花弁が特徴。葉が出るのは花が散ってから。この句の「風の蠢く」は、縮れた花を揺らす風を形容したもの。「蠢く」と感じたところが作者の感性。面白い。

夜濯の漢が干せる妻のもの 富野 宜野 顕

「夜濯の漢」は作者。体調がすぐれない奥様に代わっての夜濯。昼間は時間が取れず、夜になってから洗濯を始めた。涼しい中での家事だろうが、干しているのが「妻のもの」であることが切ない。

*何かありましたら、投句用紙表面の「通信欄」を活用し、連絡事項、質問、感想等をお書きになって下さい。楽しみにしています。



万象基金のご報告

阿部月山子様

三口

(令和7年5月1日～5月30日)

「万象」の発展のため、大切に使用させていただきます。

万象俳句会

〈新会員のご紹介〉

7月の加入者です。

仲山さよ子様

(再入会されました)

鶴田 智美様

(再入会されました)

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2025年 9月号

特集

「夜長」を味わう

●秋の夜 俳句セレクション 高勢祥子
●夜長と「〇〇」

「読書」津川絵理子 「音楽」浦川聡子
「飲み物」望月周 「天文」檜林弘一
「自由題」細村星一郎

タラビ 俳句界NOW 川井城子

特集 文語と口語の思考

○文語・口語それぞれの魅力 堀切克洋

○文語の思考 橋本榮治 中岡毅雄

○口語の思考 田島健一 土井探花

○文語の発想が光る、と思う俳句

島田牙城 大高翔

○口語の発想が光る、と思う俳句

佐藤智子 佐々木紺

追悼 岸本尚毅 稲畑廣太郎

辻桃子 青木亮人 小野寿子

中村雅樹 皆川燈

佐藤明彦 石井みや

注目句集『名和未知男の百五十句』

連載 宮坂静生 青木亮人 坂口昌弘 八田九郎 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！
充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文学の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

私のこの一句

茶摘籠担ぐ四角な背中かな 藤原千代子

私が、実家の近くの茶農家さんで茶摘みをさせてもらいうようになって4年目になります。茶摘みは、子供の頃に母の傍らで見よう見まねで覚えしました。

小振りの茶摘籠を腰に結わえて朝日の茶畑に入り、一芯二葉の柔らかな葉だけを摘みます。

昼時に、茶農家の御主人が満杯の茶摘籠を軽トラに積み込みます。その眼前の景が一句となりました。

これからも体力の続く限り茶摘みを続けたいと思います。

青き紐褪せる紐あり栗の花 名和政代

内海良太先生の選をいただいた句です。フェンス越しの栗の花を詠んでいます。当時の我が家は分譲地にあり厨の窓からは地に落ちた栗の花の紐がくの字に曲がり、その日の風向きを知りました。洗濯物を干しに屋上に出るとまだ青い紐、雪のような白い紐が垂れ下がっているのが見渡せました。その後の収穫では、早朝から栗を落とす音が雨戸越しに聞こえ、大粒の栗が我が家にも転がって来ていました。

柏句会では宮岡計次先生の指導を受け、「風歳時記」を使いました。良太先生に励まされ勇気づけられました。

神鼓びびく宰鳥句碑の冷えは手に 増田幸子

私が初学の頃、千葉の日航の句会と佐野の句会の有志吟行会に初めて参加し、内海良太先生に初めてお目にかかった。結城、下館を吟行。先生の蕪村への造詣の深さに感服し以後は機会あるごとに学ばせて戴いた。佐野吉澤美術館で開かれた蕪村展の特別資料をお送りしたことなども。

私のにわか蕪村好きを先生は気にかけて、取り上げてくださった。小なるものをまづ……の精神かと。

掲句は宇都宮の二荒山神社、師走の暮れ方の句。佐野の句友と手暗がりを吟じた。

故内海名誉主宰へ心よりの感謝の一句。

※宰鳥……蕪村が使用した俳号の一つ。

たくましき青き流れや鮎の竿 山下良江

いつの頃だったか、私はひとり電車で長いこと揺られ、いくら山が近づいたように思う頃、その駅に到着した。駅を出てからぶらぶらとあたりの景色を眺めながら道を下って行く。辿り着いたのが鳩ノ巣溪谷だった。

兩岸にはゴツゴツした岩が並び、眼前を躍るようにごうごうと水しぶきを上げて川が流れてゆく。その川岸には釣竿の先を見つめて微動だにしない鮎の釣人達があちこちに見えた。寝室に飾っている色紙を見る度に、瑞々しい若葉の頃の懐かしい思い出が蘇る。

新中央句会報 (6月例会)

令和7年6月22日(日) 東京文化会館

(出席24名)

江見 悦子 主宰選

男らの目を泳がしむサンドレス
短夜や枕の熱り裏返す

長谷川信也
三木豊子

喜屋武の海へ真つ白き花沖繩忌

加賀葉子

外湯涼しをんな等胸のふくよかに

村田由美子

石楠花や阿蘇に海馬を祀る宮

内田郁代

電球の切れし暗がり梅雨三日

久留島規子

涙拭くところを蛇に見られけり

三屋英俊

夜鷹鳴く谷戸の闇夜の肝試し

柳澤宗正

断崖にあの日の波濤沖繩忌

下嶽孝一

ゆらゆらと焼酎火出て夏芝居

中村千久

己が影水に引きづる螢かな

吉中愛子

夕闇の家吹き抜くる風涼し

桔梗 純

④ 父の日の昨日と同じ夜風かな

三屋英俊

⑤ 父の日の昨日と同じ夜風かな

三屋英俊

「父の日」は6月の第3日曜日、久しぶりに家族が集まり

賑やかだったが、皆が引き上げて静かになったあと夜風に吹

かれている作者。「夏のあと」だけではない寂寥感、母親と

父親の存在感の違いを感じているのか。「昨日と同じ」の措

辞が切ないが、それはそれで良しとし、これも人生の一場面と肯う認識の句。

喜屋武の海へ真つ白き花沖繩忌 加賀葉子

「沖繩忌」は6月23日。「喜屋武の海」は、沖繩本島最南端に位置する激戦地の一つ。沖繩戦末期には、追い詰められた住民が喜屋武岬から身を投げた場所だ。「真つ白き花」は百合の花のイメージだろうか、真つ青な海へと落ちていった人々への鎮魂の供花だ。

外湯涼しをんな等胸のふくよかに 村田由美子

露天風呂に憩う女性たちの姿を詠んだ。「胸のふくよかに」に、瑞々しい姿態を想像した。「外湯涼し」でいさぎよく切れ、中七下五とリズム良く収めた。

夕闇の家吹き抜くる風涼し 桔梗 純

平易ですっきりとした句。暑い一日が終わり、夕闇が迫る家の窓を開け放つと、吹き抜ける風が心地良い。地味ではあるが、実感の句。

中村 千久 選

初夏の風吹き抜くるカフェテラス 塗木翠雲

短夜や枕の熱り裏返す 三木豊子

高千穂の谷鳴き交はす時鳥 内田郁代

沖繩忌ニライカナイの海の青 江見悦子

涙拭くところを蛇に見られけり 三屋英俊

眠れぬ夜腐草螢となる頃よ 松井宣夫

バス見えて片蔭の人みな列へ 三屋 英俊

夜鷹鳴く谷戸の闇夜の肝試し 柳澤 宗正

夏の星クラリネットの四重奏 安藤美酒々

灰缸き螢火姥が身投げ池 三屋 英俊

多作多捨多捨多捨多作心太 大久保 進

夏服ややはらかくゐて修道女 榎本文代

④ 鳴り止まぬ無人踏切白あぢさゐ 江見悦子

⑤ 鳴り止まぬ無人踏切白あぢさゐ 江見悦子

踏切の警報器の音が「鳴りやまぬ」という不穏な気配。鳴り続けるのは尋常ではない。近くで人身事故があったのではないか、そんなことを思わせるのだ。「白あぢさゐ」が何か不吉なものを思わせた。

バス見えて片蔭の人みな列へ 三屋 英俊

池袋駅のホームで似た光景に接していた。いつもなら白線の後ろに整列するはずの人たちは、ホームの屋根が作る日陰で電車の到着を待っていた。掲句はバス停での囁目。「片蔭」という季語をこのように使ったことに新しみを感じた。

夏服ややはらかくゐて修道女 榎本文代

黒衣からグレーの「夏服」に衣がえをした「修道女」への着目がよかった。清貧・貞潔・従順の誓いを立てて祈りに生きる人。薄手で軽い僧衣をまとう姿を、「やはらかく」とし、「着て」ではなく「ゐて」と捉えたことで、その存在感が浮かび上がった。

榎本文代 選

朝もやの裾よりほどけ五月富士 神田美穂子

米買ふや青田風吹く佐久平 南雲 秀子

風渡る近江の海や眼の涼し 加賀 葉子

涙拭くところを蛇に見られけり 三屋 英俊

和菓子屋に時計が鳴つて江戸風鈴 三木 豊子

風鈴の初めの一打透きとほる 神田美穂子

ゆらゆらと焼酎火出て夏芝居 中村 千久

梅雨夕焼エスプレッソをベランダで 田中道江

鳴り止まぬ無人踏切白あぢさゐ 江見悦子

喪婦りの祭りの中を通るかな 長谷川 信也

多作多捨多捨多捨多作心太 大久保 進

ほととぎす良太の名のり間のさやか 村田由美子

⑥ 潮入りに乾らぶ流木夏ひばり 神田美穂子

⑦ 潮入りに乾らぶ流木夏ひばり 神田美穂子

河原に散らばっている流木は海から流れてきたもの。すっかり乾びている。砂石を歩いているのは「夏ひばり」。春には囀りながら空高く舞い上がっては急降下していた姿を思うと、広がっている景は侘しい。

ゆらゆらと焼酎火出て夏芝居 中村 千久

「焼酎火」は「歌舞伎で綿に焼酎（今はアルコール）を浸したものを差し金の先に吊って燃やす火。青い炎を出す」と『広辞苑』に載る。「ゆらゆら」が炎の様子を伝える。そして

怪談であらう芝居が佳境に入ってきたことを思わせる。

梅雨夕焼エスプレッソをペランダで 田中道江

「ペランダ」は外気に開かれていた空間なので、歳時記には夏の季語として載るが、ここでは「梅雨夕焼」が季語。雨上がりの空を茜色に染める夕焼は美しい。ペランダで飲むコーヒーはエスプレッソ。おしゃれな方である。

神田美穂子 選

もろ鳥の声澄み渡る夏至の朝	柳澤宗正
電球の切れし暗がり梅雨三日	久留島規子
退院の指ほつそりとソーダ水	江見悦子
玉虫の胸にぶつかるとみどりの眼	吉中愛子
売店に朝刊の東夏燕	榎本文代
千貫の神輿支ふる声と汗	小池清晴
ゆらゆらと焼酎火出て夏芝居	中村千久
断崖にあの日の波瀾沖繩忌	下嶽孝一
包丁に吸ひ付く羊羹新茶酌む	三木豊子
初蟬や大きな雲の動き出す	榎本文代
多作多捨多捨多捨多作心太	大久保進
掘跡へ色重ね合ふ濃紫陽花	塗木翠雲
吐く息に四肢ゆるびたり水中花	江見悦子

④ 吐く息に四肢ゆるびたり水中花 江見悦子
俳句は鑑賞者の数だけそれぞれの読み方がある。掲句の場合

合私には二通りの鑑賞の仕方が考えられた。まるで息を吐くように徐々に水中花がほどけ広がって行く。それは四肢が緩んでいくように。又もう一方は、作者がゆつくりと呼吸をしていると心身ともにリラックスしてくる。それはまさに水中花がゆつくりと開いていくように。

ゆらゆらと焼酎火出て夏芝居 中村千久

焼酎火は、歌舞伎で狐火や幽霊場面などに用いるものである。その存在は知っていたが、その名称はこの句に出会い初めて知った。夏芝居であるから、幽霊が出てくる場面であることは間違いない。あのどろどろという太鼓の音まで聞こえてくるようだ。季語が動かない。

掘跡へ色重ね合ふ濃紫陽花 塗木翠雲

「色重ね合ふ」の措辞に非常に多くの様々な色の紫陽花が堀跡を埋め尽くして咲いている景が見えて来る。一読景に見える句であり、印象鮮明な句となっている。

今後の新中央句会の予定

▽9月28日(日) 東京文化会館中会議室1 13時より

▽10月例会は、全国俳句大会前日のため中止します。

ルビーの小函 (9月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 8 貝摺 (かいずり) | 23 青条揚羽 (あおすじあげは) |
| 9 椽 (えん) | 24 簾戸 (すど) |
| 11 松の秀 (まつのは) | 虎杖の花 (いたどりのはな) |
| 12 海霧 (じり) | 曹達水 (ソーダスイ) |
| 火照る (はてる) | 25 嬰兒 (みどりご) |
| 13 年魚 (ねんぎょ) *「鮎」の別称 | 蝮交尾む (まむしつるむ) |
| 打菓子 (うちがし) | 虎魚 (おこぜ) |
| 巴波川 (うずまがわ) | 26 花溪蓀 (はなあやめ) |
| 14 筍 (へらぶな) | 花樗 (はなおうち) |
| 釣果 (ちょうか) | 27 骸 (むくろ) |
| 顕 (あらわ) | 杜鹃 (ほととぎす) |
| 15 玫瑰 (はまなす) | 千木 (ちぎ) |
| 18 斎田 (いつきだ) | 28 礎 (いしじ) |
| 池塘 (ちとう) | 36 海紅豆 (かいこうず) |
| 黄菅 (きすげ) | 杜若 (かきつばた) |
| 蛭蓆 (ひるむしろ) | 37 青葉木菟 (あおばずく) |
| 黄泉 (よみ) | 隠沼 (こもりぬ) |
| 17 羽搏き (はばたき) | 44 揺蕩うて (たゆとうて) |
| 頻り (しきり) | 禊場 (みそぎば) |
| 18 時鳥 (ほととぎす) | 結葉 (むすびば) |
| 海馬 (かいば) | 山翡翠 (やませみ) |
| 不如帰 (ほととぎす) | 緑苔 (すいたい) |
| 19 声明 (しょうみょう) | 45 堀浚ひ (ほりざらい) |
| 落羽松 (らくうしょう) | 46 海芋 (かいう) |
| 20 跣 (はだし) | 泥濘 (ぬかるみ) |
| 追熟 (ついじゅく) | 壱道 (はりみち) |
| 香華 (こうげ) | 分蘖 (ぶんけつ) |
| 斑猫 (はんみょう) | 47 楊梅 (やまもも) |
| 21 出会して (でくわして) | 48 舍人 (とねり) |
| 22 叢菜 (どくだみ) | 49 素馨 (そけい) *「茉莉花」の別称 |
| 23 早桃 (さもも) | 52 金縷梅 (まんさく) |
| 磯鴨 (いそひよどり) | |

北 南 西 東

消 息 等

江見悦子主宰、小林愛子名誉顧問の句

「くぢら」7月号に

もてなしや綾子の軸とさくら餅 悦子

花の雨指で溶きある吉野葛 愛子

「初蝶」7月号に

寺町の路地に消えたる春みぞれ 悦子

「たかな」7月号に

飛石の凹みに昨夜の寒の雨 悦子

「俳句」7月号に福島せいぎ氏の句

台湾の春

初燕砂金の谿のうす濁り

地震走る朱き断層芽吹き初む

あをぞらに鶯が春の鮎落とす

ふらこの影の揺れをり移民村

マンパウを食ひ損ねたる春の旅

からすみを炙り俳諧談義など

台湾の媽祖にもらひし春の風邪

カボックの花咲く丘に仮寝せむ

季節風吟行会

6月6日 20名参加で行われた。静岡市

内の用宗漁港、早桃の産地長田地区、安倍

川の河口の河川敷等を吟行した。

(神田美穂子)

花南瓜敷き藁厚き磯烟 高橋一夫

青葉潮漁船いつ気にも海外へ 小梁洋子

身を預け我は児となるハンモック 本多ひとみ

選別の小屋より溢れ早桃の香 石川裕子

足下に蚊遣の煙選果場 加山ひさ子

花街に残る髪結び鉄線花 大長文昭

木々の間に流るる雲やハンモック 藤本節子

舟の名のひと文字擦れ卯月波 荻野加壽子

大河口手びさしに見る五月富士 藤原千代子

潮入に乾ぶ流木練ひばり 神田美穂子

「佐野吟行句会」唐沢山県立自然公園にて

6月25日開催 参加者10名 予報は曇

のち雨。昼頃から大雨に遭遇す。

(亀田やす子)

雨来るか下山を急ぐ竹煮草 義本美智江

木の間より夏日うつすら大炊の井 仲山さよ子

四つ目垣どくだみの花いと白し 飯塚キミ

虎尾草や虎口に雨の降り出せる 店網洋子

紫陽花や雨粒大き大炊の井 売野 緑

水琴窟花南天の傾ける 茂木弘子

老鶯や唐沢山の峡深く 島田和枝

神殿の空の明るし夏つばめ 芝宮留美子

さみだれや赤き魚影の大炊の井 増田幸子

夏つばめ赤松の空ほしいまま 亀田やす子

小林愛子名誉顧問 第三句集「くれのおも」
発売。おめでとうございます。

95年の間に多くの人に巡り会い、生きてゆく御縁をいただきました。誠にありがた
いことでした。今日の続きとしての明日も、
美しい自然を感じていきたいと思っていま
す 「あとがき」より抜粋

くれのおも早や夕風をまとひけり
首塚のあと 胴塚へ麦の 秋
乗り越して見知らぬ町の月に逢ふ
人影の消えてらんまんたる 桜
秋もはや落つるにまかす山葡萄
寒波来るロビーに為替レート表
行くところ目向は茅花湧きいづる
炎天下足場へスパナ投げ上げし
よろけ杖毛虫潰してしまひけり
シャンブーの頭預けて年の暮
新玉の年の日を受くわが余白
第14回与謝野町蕪村顕彰全国俳句大会

投句料 5句(自由題3句、前書俳句
1句、与謝野をうたう1句)千円
投句締切 令和7年8月19日
詳しくはホームページ参照

(報・編集部)

(←この線より切り取ってください)

令和八年

万象作品

一月号

(十月十五日締切)

都または市・町・村名	
姓 号	がなり
年齢	

(句の表記は歴史的かなづかいで) (*の枠内には何も書かないでください)

*

*

*

*

*

9390364

射水市南太閤山13
|
24

万象作品投句係行

110円切手を
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

編集後記

▽今号から編集と校正に、一由久美子、松井宣夫（いずれも東京）と高田みや子（千葉）の三氏が参加してくれることになりました。「編集後記」にも、校正担当の喜多尾明子、下嶽孝一の両氏と共に新たな執筆メンバーとして加わってくれます。待望久しかった増頁を喜んでいきます。

（千久）

▽今年も山梨県側は7月1日、静岡県側は7月10日富士山の山開きが行われ夏山シーズンが始まった。両県とも入山料4千円を徴収するようになり、ルールも色々変わったようだ。静岡側の須走口の山開きをニュースで見たところ、富士宮口とは違い猿田彦が先導していたので、来年は須走口の山開きに行ってみたいと思った。（美穂子）

▽学校に勤めていたせいか、9月は4月以上に力が入る。先学期の反省と修正が新たな試みへの意欲に繋がるから。そして今月から3名の方が編集に加わる。頼もしい限りです。どうぞ宜しくお願い致します。また「万象」が

一步前進する。経験と反省と新たな力によって。

（宏子）

▽葛の蔓の伸びようときたらすさまじい。一日に1mも伸びるかしら。以前読んだ小説で主人公の植物学者が言うに、「伸びてゆくその音さえ聞こえる」そうだ。毛羽だつて鎌首をもたげるさまの蔓先は凄みがある。そんな葛にいつもの散歩の近道を塞がれてしまった。

とはいえ秋口になって葛原に風が渡り、葉陰に赤紫の花を見つけるのもうれしい。

（明子）

▽神戸市には「鉄人28号」のモニュメントと「三国志」の登場人物たちの等身大石像がある。神戸市出身の漫画家・横山光輝氏に因んだもの。松尾芭蕉像は彼が旅した各地に存在する。足立区千住の「史跡奥の細道矢立初の碑」の像や松島・象潟・出雲崎など。蕪村の像は大阪市に、また松山市には正岡子規像がある。時代を超えて愛される句は「月並俳句」から革新している。

（孝一）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 九月号

第二十四巻 第六号

通巻 第二八二号

令和七年八月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0007

東京都杉並区高井戸東一-三-1603

万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

令和7年度「万象」全国俳句大会・「万象」同人会総会 案内

開催日

令和7年10月27日(月)

午前11時(午前10時30分より受付開始)～午後4時終了予定

会場

ホテルグランドヒル市ヶ谷(東京都新宿区市谷本村町4-1) ☎03-3268-0117

【交通】JR中央線・総武線、都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

同人会総会

総会・中山純子記念俳句賞表彰 他

全国俳句大会

◆表彰 万象俳句賞
万象新人賞

◆披露 令和7年度新同人

大会入選作品(特選句には選者染筆贈呈)

一万三千円(昼食代を含む)

申込み

8月20日(水)一旦締め切りましたが、会場にはまだ若干の余裕がある為、9月20日(土)まで延期します。

参加希望者は会費を左記へお振込み願います。会費納入をもって参加申込みとします。

・ゆうちょ銀行より振込 ゆうちょ銀行(記号)11300(番号)22149281(通常貯金)

・他の金融機関より振込 ゆうちょ銀行(店名)138(口座番号)2214928(普通預金)

口座名義 コイケキヨハル ☎03-3681-5900

※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。

※有志吟行会は実施いたしません。大会終了後、別室にて懇親会(希望者による二次会)を予定しています。

大会作品募集

多数のご応募、ありがとうございます。8月15日を以て、受付を終了しました。

令和7年度「万象」全国俳句大会実行委員会

大会委員長 江見悦子

令和7年度「万象」同人会総会

実行委員長 中村千久

令和7年度「万象」同人会総会

実行委員長 中條睦子